

野鳥お勉強会  
第 300 回記念講演会 & パネルディスカッション  
報 告 書



平成25年 3月

野鳥お勉強会



## はじめに

昭和 62 年(1987 年)から、月 1 回の野鳥お勉強会を行ってから 26 年目。昨年は 25 周年(四半世紀)を迎え、来年はいよいよ 300 回を迎えるのだと、記念開催への高ぶりと同時に焦りも感じないわけにはいかない、というのが当時の正直な想いでした。加えて 300 回にふさわしい内容から、「誰を迎え、どこで、どんなふう」などを考えると、なおさらに気持ちが萎縮し震えてしまいました。

このたびの、北海道野生生物基金の助成が決まった時には、これまで悩んでいたものが、心の奥に描いていた開催イメージを実現可能へと大きく変化させてくれました。そして、私のあこがれの人である樋口先生や、道内で鳥の分野では第一線の方々を迎えられる運びとなったのです。

北海道の豊かな自然や動植物を保全していくには、生物多様性の保全を前提とした取り組みをしなければならない時代であると考えます。

本開催が北海道の自然環境の保全や野生生物の保護管理、ならびに生物多様性の保全の充実へとつながることを期待いたします。

なお、この記念講演会 & パネルディスカッション開催の報告書は、都合開催内容を極力そのままにまとめたいことから、議事録的に整理したものです。

最後に、開催にあたり、実行委員及びスタッフの皆さま、財団法人・北海道新聞野生生物基金の皆さまに心よりお礼と感謝を申し上げます。

平成 25 年 3 月

野鳥お勉強会 代表 富川 徹



## 目次

はじめに

1 野鳥お勉強会 第300回記念講演会&パネルディスカッション開催の概要 …… 1

2 第1部 野鳥お勉強会 第300回 記念講演

演題:「鳥の渡りと生物多様性の保全」 …… 3

樋口 広芳(慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)

3 第2部 パネルディスカッション

テーマ「鳥と生物多様性+(プラス)」 ……17

<パネリスト>

川路 則友(独立行政法人 森林総合研究所北海道支所長)

小野 宏治(環境省釧路自然環境事務所野生生物課長補佐)

武田 忠義(北海道環境生活部環境局自然保護課主査)

大橋 弘一(野鳥写真家・自然雑誌faura 編集長)

樋口 広芳(慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)

<コーディネーター>

富川 徹(株式会社 野生生物総合研究所主任研究員・野鳥お勉強会代表)

あとがき

資料

- ・ 開催資料
- ・ 配布パンフレット(写真)
- ・ 案内チラシ
- ・ 新聞記事(関係分)



## 野鳥お勉強会 第 300 回記念講演会 & パネルディスカッション開催の概要

昭和 62 年(1987 年)に設立、野鳥を主に動物やその他自然情報の交換の場として月 1 回の野鳥お勉強会を行い、昨年6月に第 300 回を迎えた。当会は、野鳥や動物、自然に関心があり各分野で活躍されている学識経験者、大学などの教師、公務員、会社員、学生、主婦などをボランティア講師に招き、得意とする分野や身近な野鳥情報等の講義をもとに、参加者と自由に語らい交流を行っている。

300 回開催を記念して、昨今北海道で注目されている生物多様性の保全に鑑み、それに関わる記念講演及びパネルディスカッションを開催し、北海道における鳥類及び自然の保護への普及啓発をねらいとした。第1部では鳥類と生物多様性の保全が専門の、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授(元東京大学大学院農学生命科学研究科教授)の樋口広芳先生より、記念講演として「鳥の渡りと生物多様性の保全」と題してのお話をいただいた。第2部では、北海道の鳥類保護分野に携わる第一線の方々をパネリストにお招きして、「鳥と生物多様性+(プラス)」をテーマにディスカッションが行われた。これら開催は、野鳥お勉強会(主催)、北海道新聞野生生物基金(協賛)、北海道野鳥愛護会・石狩鳥類研究会(協力)で実施された。開催案内は、当会のホームページをはじめ、チラシ及び封書案内等により広く呼びかけ、参加者は総勢 130 人を超える人たちが参集した。

記念講演で樋口先生は、「私は 20 年ほど鳥の渡りについて衛星追跡をやっていて、その主要な成果を紹介し、今日は鳥の世界をめぐる生物多様性について楽しみながら話を進めたい」と始まり、1時間 20 分の中で貴重なスライドを多用された分かりやすいお話である。○渡り鳥はそれぞれ独自の渡り経路をもつ渡りをしているが、個体、季節、年、あるいは食物、気象によって異なる。○東アジアの森林や湿地の生態系は渡り鳥によってさまざまなかたちでつながり、生息地の具体的なつながりを明らかにすることは、種の保全、感染症の伝播、温暖化の影響を考える上で重要である。○個々の生態系は渡り鳥を介しつながり、保全には地域の視点と地球規模での視点の両方をもつこと。渡り鳥と生息地保全には国際協力が不可欠、とまとめられた。おわりに、「鳥たちがもつ力、魅力というものが計り知れない。私たちはそうした素晴らしい生きものと付き合っているということを日々私自身信じている」と締めくくられた。

パネルディスカッションでは、各パネリストから自己アピールと生物多様性の保全についてスライドを使いながらの自由な話とし、所属される行政、研究者、ジャーナリストという立場からの話をいただく。生物多様性の保全や取り組み方向として、○北海道独自のシステムでもデータの蓄積が重要で、同時に国際的な連携でデータを集め解析して地域の保全対策を立てる(樋口)。○堅苦しい要請でなくてももっと声を上げ相談しよう(武田)。○希少種でなく直接手をだせなくても、共通課題から保全の解決策はある(小野)。○写真撮影では珍鳥だけに目を向けないことが大事(大橋)。○外来種のアライグマが森林性鳥類を脅かしている(川路)、などの方向性が示された。また会場との熱心な対話もはずみ会を盛り上げた。最後にコーデ

ィネーターの富川から、「私たち市民、道民が思っている考えを提示しながら、生物多様性を意識した行動に変える必要がある」とあり閉会となった。

依然として、生物多様性のもつ意味や関連性についての難しさがあるものの、今後はさらに注目して情報等を共有しながら勉強できる機会の増えることに期待したい。

300 回開催にふさわしい講演及びディスカッションは、多くの皆さんのおかげで有意義で素晴らしい内容に終始した。これらを踏まえさらなる会の飛躍につなぎたい。

(北海道新聞野生生物基金実績報告書より 平成 25 年 3 月)



受付風景



## 第1部

### 記念講演 『鳥の渡りと生物多様性の保全』

樋口 広芳

慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授



## 第1部 野鳥お勉強会 第300回 記念講演

演題:「鳥の渡りと生物多様性の保全」

樋口 広芳(慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)

松山:開会

お待たせいたしました。これより野鳥お勉強会 第300回記念講演会&パネルディスカッションを開催します。

はじめに、本会代表の富川徹より挨拶を申し上げます。

富川:代表挨拶



野鳥お勉強会代表の富川です。本日は、この「野鳥お勉強会第300回記念講演会&パネルディスカッション」の開催にあたり、このように大勢の皆さまの参加、また遠方からも足をお運びいただきまして誠にありがとうございます。

今この時期は、北海道の春真っ只中の鳥や自然の魅力あふれる時期ということで、このお勉強会もちょうどこの時期季節に行われるという巡り合わせとなりましたが、これも“神様のおぼし召し”と受け止められる有難いことと思っています。

さて、このお勉強会は昭和62年(1987年)にスタートした会です。それから26年目となりますが昨年は25周年ということで、これまでの会の経緯や開催の内容などを簡単にまとめ、本会のホームページや北海道野鳥愛護会誌などにお示したところです。その中には書いてはあるのですが、設立当初はまさに自然ブームということで、各地では自然関係の講演会やイベントなども目白押しでありましたが、ただ“聞かされる”という一方通行的な進行が多く、どちらかという簡単な質問をするにも内容の程度で躊躇する雰囲気がありました。

そんな中、「好きな鳥や自然のことをもっと楽しく自由に話し合える場」を創造したいと、アニメ鉄腕アトム原作者の手塚治虫さんがやっていた「人の意思の交流が新しい社会づくりに貢献する」として「人の出会いの場」、いわゆる「サロン」をつくっていたことにすごく賛同していたことも心を動かしました。今もそうなのかも知れませんが、野鳥や自然などを知るという勉強は大事だけど関係する団体の会員獲得のためにもいいこと、そして世は週休二日制によって飲食店などでは客離れもあるなど、本会を行う会場を安く借り上げて開催できるというメリットもあって、恩師である故柳沢信雄先生(当時北海道野鳥愛護会副会長)とともにはじめました。

思えば、「こんな会が、よく続いてきたなあ」というのが実感ですが、これも関係の皆さまに支えられ、助けられてきた“おかげ”であると深く感謝する次第です。今日は300回、これまでも100回、200回と区切りで小規模ながら記念開催を行ってきました。そのたびに必ずと言って皆さんからのメッセージが寄せられ、「継続は力なり、50、60歳になっても続けよう、300回を目指せ！」などの

たくさんの心温まるお言葉を頂戴しました。まさに 300 回を迎える日が来るとは驚きの何物でもありません。

何はともあれ、今日は第1部では鳥の大先生で私のあこがれの人である樋口先生をお迎えできることが夢のようです。また、第2部では、北海道の鳥類保護分野に携わる第一線の方々をお招きしてのパネルディスカッションが行われます。そして、第3部はこの会がないとお勉強会をはじめまらないという交流会です。このように盛大な開催となりましたことをあらためて関係の皆さんに深く感謝の意を表します。今日は少しだけ長い日とはなりますが、この機会を皆さんとともに共有しながら、有意義にお時間を過ごせますことを期待し、簡単ではありますが開会の挨拶といたします。

松山: ありがとうございます。

それでは早速第一部、野鳥お勉強会 300 回記念講演「鳥の渡りと生物多様性の保全」ということで樋口広芳先生にお話をいただきたく思います。その前に先生のプロフィールをご紹介します。先生のことは、皆さんよく御存じかにと思いますがあらためて紹介させていただきます。



先生は 1948 年横浜で生まれ、小さい頃から大変鳥が好きで、自宅の庭でキンケイやアヒル、ゴイサギなどを飼われていたということです。それも孵卵器からかえすということの本格的な飼育をされていたとお聞きます。大学は日本鳥類大図鑑編者の清棲保之先生のいた宇都宮大学の修士課程を修了し、東京大学博士課程に進まれました。77 年には東大助手となりアメリカのミシガン大学動物学博物館客員研究員として研究に励まれ、94 年東大農学部、96 年同大学院農学生命研究科教授をなされ、今年 3 月末定年退官されました。4 月より慶応義塾大学大学院・メディア研究科特任教授になられています。さらに東京理科大学の教授も兼任されています。

鳥に関しては大変幅広く調査研究をされていますが、主なものとしては人工衛星を利用した渡り鳥の追跡研究に深く関わった研究があげられ、これによって鳥の渡りのルートが新たに解明されています。鳥は国外への移動があるので対象地域では、ロシア、中国、インドなど、対象種はマナヅル、タンチョウ、ハチクマ、サシバなどです。そのほか、都市で問題のカラスと人間生活の軋轢発生のしくみ、マガンによる農業被害の発生機構、サシバの環境利用と採食形態、コアジサシの新繁殖地創生と保全管理などの研究をされています。これはごく一部です。最近では今年の 3.11 の東日本大震災に伴う福島原発事故を受けて、「放射能汚染が鳥類の繁殖生存分布に及ぼす影響-チャルノブイリ原発事故 25 年後における鳥の世界」ということで福島での取り組みや提言について関与されおり、幅広くご活躍され、これまで山階芳麿賞や鳥学会などの団体から多くの表彰を受賞されておられます。また、鳥学会をはじめ、日本生態学会、動物行動学会などの会長、理事、評議員などを歴任され、また、行政関係では、国土交通省などで野生生物保護や鳥インフルエンザなどの対策会議等の委員長や座長をされ現在もお勤めされています。

著作に関しては赤い卵の謎、保全生物学、カラスの自然史、訳書ではダーウィンフィンチ、野外鳥類学への招待、フィンチの嘴ガラパゴスでおきている種の変化？など多数の著書があります。本職の論文では数は500を超えるとうかがっております。大変多くの実績を残されておられます方でございます。今日は遠く神奈川から札幌まで来ていただいたことから、期待してお話をお伺いしたいと思います。先生よろしく願いいたします。

樋口：



大変丁寧な紹介をいただきありがとうございます。お話いただきましたように、3月まで東京大学にいまして現在慶応義塾大学の湘南藤沢館にいます。まだ2ヵ月半しか経ってなく移ったばかりで慶応大学の樋口というのが、なんとなく恥ずかしく言えない状況です。今日は紹介にもありましたように、鳥の渡りについて衛星で追跡するということを20年間やっていて、その主要な成果を皆さんに紹介して鳥の世界をめぐる生物多様性(後で述べるが)について、楽しみいただきながら話を進めたいと思います。ここにはバードウォッチャー、一般の方などたくさんおられるので、専門的な難しい話は抜きにして鳥の渡りを実感していただきながら、自然や生きものの世界を楽しんでいただければと思います。

ご存じの方もおられますが、鳥の多くは毎年秋と春、繁殖地と越冬地の間を長距離移動します。鳥たちはこの渡りの課程で、各地の自然環境から水や食物を得ると同時に、遠く離れた国や地域に自然をつなぎ、健全な維持に貢献しています。

一方、鳥たちは、この渡りの過程でさまざまな環境問題に遭遇し、急激に減少しています。あるいは感染症に伝播することになり、人の産業や健康に重大な影響をおよぼしています。そうしたことから、鳥の渡りにかかわる研究は、今日、生きものや自然の多様性、「生物多様性」の保全や管理の上でも、もっとも重要な課題の一つに数えられています。

生物多様性というのがいつものキーワードと思っていたのですが、ここ2~3年、新聞、テレビ、雑誌などでよく扱われてきているので、あまり説明することもないと思いますが、複雑な概念として説明を始めるとかなり時間もかかります。ここではとりあえず生きものや自然の多様性、あるいは生きものの賑わい、私の好みのことと言えば命の賑わいということで認識いただければと思います。そうした生きものや自然の多様性(生物多様性)で代表させるということです。

今日は、1時間20分ほどいただき、次の6つの話題について話したいと思います。

1. 渡り鳥の減少
2. 渡りの衛星追跡

3. 鳥によって異なる渡り経路
4. 渡り様式と生息地利用
5. 鳥の渡りと地球温暖化
6. 人と人をつなぐ渡り鳥

ひとつ目は、渡り鳥が最近地球規模でも身近なところでも減少してきていることについて話します。それから、2つ目は、減少の状況を探る、あるいは保全に向けて対策をとっていくうえで渡りの経路をきちんと把握していくということが大切である話、そしてそれを行う上で衛星を使った追跡が重要な役割を果たしていて、たくさんのいろんなことが分かってきています。その研究手法について紹介します。3つ目は、その成果をいくつか紹介します。渡りの経路だけではなくてさまざまな情報が衛星追跡によって分かっています。4つ目は、渡り様式と生息地利用について少し複雑な話をします。5つ目は、地球温暖化との関連や問題について触れたい。地球温暖化と生物多様性に関わる問題を別個に話されてしまうことがあります。私は研究もしているが、自分らしく鳥の渡りに焦点を当てたことの話をする。そして、6つ目の後に渡り鳥は異なる地域と地域の自然をむすびつけているが、同時に渡りの経路沿いの人と人をつないでいるという役割も果たしています。そのことについてお話します。

## 1. 渡り鳥の減少

地球規模で渡り鳥が減少してきています。いろんな情報がありますが、スライドはロシアと中国の国境にアムール川という大河が流れるが、そのアムール川の中流域です。ロシアの研究者が長年にわたってコウノトリの生息数や繁殖に関わる情報を集めています。1980年代からのデータですが個体数が年によってバラツキはあるが年々数が減少しているものです。とくに1990年代に入る頃から以前の半分くらいになっています。このような状況を見ると、皆さんの多くは繁殖地のアムール川中流域で、さぞかし大規模な自然環境の破壊がおきているのかと思われるかも知れません。ところが、驚かれるとも思いますが、コウノトリの繁殖する環境はずばらしい湿原で広大に残っています。私は渡り鳥の研究から世界あちこちに出かけていますが、これほど素晴らしい、美しい自然が広大に残っているところは、おそらく世界広しといえどもここくらいしかないでしょう。朝の5・6時から夕方7時くらいまでヘリコプターで上空を飛びながら調査したが、どこまで行ってもこの素晴らしい自然は、まるで天国(私は行ったことがないが・・・笑)のような、パラダイスとも思われるような環境がつながっています。である意味にもかかわらず、コウノトリをはじめとしたさまざまな生きものがいるのですが、数が減っています。そうしたことから、繁殖する場所の環境そのものも勿論関係はするのですが、おそらく渡ってきた先々でいろんな問題を抱えている問題があるのではないかと思います。

日本に渡来するタカ類のサシバも年々減少していますし、また後でも話しますがハチクマという鳥がいて、ハチクマかとかよく言われるがハチを主食にしているタカがいて、山梨でも生息地点が年々減ってきています。日本にちょうど今頃に東南アジア方面から渡ってくる鳥たちも数が減って



います。ヨタカ、アカショウビン、サンショウクイ、サンコウチョウ、アオバズク、ヒクイナなど、あまり一般の人たちに知られていないような、でも姿や鳴き声が美しい鳥たちの数が著しく減ってきている。そのなかで、サンコウチョウという尾が長く、「ツキヒホシ(月日星)ホイホイホイ」と鳴いて月と鳥と星が3つの光を表す鳥(三光鳥)?という鳥がいますが、埼玉県東松山市の減少過程をみると70年代初めには個体数20だったのが、減って90年代半ばではゼロにまでなっています。この時代、宅地造成、ゴルフ場造成、農薬散布などさまざまなことが減少に関わったことは確かであると思われます。その後、いろいろと検討した結果、それだけでは説明がつかないという結論になりました。細かいことは省きますが、越冬地の環境破壊が大きな原因になっているのではないかとということが考えられます。

ひとつは、越冬地がよく分かってはいないのですが、スマトラ島やマレー半島での熱帯雨林の大規模伐採ではないかと思われます。熱帯雨林の分布をみると1930年代はじめからみてかなり減少しています。32年の減少率を100とすると、その後の50年間で約30%減っています。80年代に入ると、わずか5年間でそれを倍くらい上回る勢いで減少しています。1980年代初頭はまさにこの時代に相当しており、サンコウチョウをはじめとした日本の多くの熱帯雨林を越冬地として日本に夏鳥として渡ってくる鳥が減少したと考えられます。越冬地の環境破壊がひるがえって日本の里山やブナ林に渡来する鳥たちの減少を招いているのではないかと思われます。ただし、日本のなかでサンコウチョウが急激に減っている地域がある一方で、ほとんど変わらない南西諸島や静岡県掛川市周辺といった地域もあります。繁殖地や越冬地の問題で済ませるという大雑把なことではなく、どこの地域のものがどこに行ったのか、それが熱帯雨林の消えたところなのか、まだ残っているところなのか、ということを含めて今後詳しく調べていく必要があります。渡り鳥のように地球規模で移動する動物の保全のためには、移動の経路全体を正確に調べ、越冬地、中継地、繁殖地の位置と、そこでの保全上の問題点などを明らかにする必要があります。そうした渡りの経路を明らかにする上では、人工衛星を利用した追跡(衛星追跡)が有効です。その仕組みを簡単に紹介します。

## 2 渡りの衛星追跡

鳥の渡りの研究というのは、足環を付ける、一番早いのは鳥に赤い糸をつけることで始まりましたが、標識を足などに付けて調べることはいろんな情報をもたらす貴重な調査研究になります。如何せん、どこに鳥がいるのか分からない、だからなのだけど、とくに極東地域、ロシア、北朝鮮、中国、韓国や南の地域に行っても政治的に難しい地域ばかりで、標識を1000個、10000個付けても極々わずかししか回収されないという状況で得られる情報は楽天的です。楽天的ではあるけれどそれなりに貴重なもので、鳥の保全上においてはきちんと使えるものなのです。そうしたところで1990年代に入ってからいい衛星を使うことが可能になってきました。私は衛星追跡の研究に当初からかわり、これまでの20年間にさまざまな研究を国内外の研究者と共同研究という形で行ってきました。衛星追跡のしくみは、鳥に付けられた送信機から電波が発信されていて、人工衛星(NOAA)のアルゴシステムによって電波が到達します。その蓄積されたデータを地上基地に送る



ことで、時間、緯度、経度が読みだされ、インターネットにより研究者に届くというしくみです。人工衛星の軌道は約 100 分に 1 回地球を無軌道で回るもので、一度鳥に送信機が付けられるとコンピューター上の仕事になります。だからとても効率よく情報が得られます。鳥たち(鳥でなくてもなんでもいいが)、どこにいてもほとんどタイムリーに情報を知ることができます。それ

を始めるにあたっては、まず鳥を捕まえて送信機を付けるということが必要です。日本製、アメリカ製、ドイツ製などいくつかあり、最近一番小さなもので 5g、小指の先の節くらいで、大きいもので 50g、100g くらいものがあります。それを体重の 4% 以内で収めれば、通常の飛翔、採食、繁殖への影響はないと分かっています。これをハチクマに付ける場合には太陽電池が可能なランドセルのように背負った形のもので複数年(2~3 年)の寿命というのがあります。ハクチョウでは首環に装着します。データはデジタルで、通信機の ID には鳥の番号、年月日、時間、緯度経度、LC(位置精度)などが示されています。アルゴシステムはあまり制度がよくなく、0~3 の数字の高い方が位置精度が高いのです。極めて大雑把に言って、アルゴシステムを使った衛星追跡の位置の誤差を静止した状態で示すと約 1km くらい(約 60%の測位点が 1km 以内に入る)という、そのくらいの差があります。ですから、細かい 1km くらいの範囲でどう動いているということでは不向きですが、何百、何千 km、10,000km を超すような長距離の移動を追うには十分使えます。

### 3. 鳥によって異なる渡り経路

そこでどういうことが分かってきたかということを紹介します。九州の出水では千羽鶴ならず万羽鶴が来ます。13000 羽ほどのツルの足どりを 1990 年代はじめで衛星追跡を始めたころのものです。これは春で出水から北上して対馬海峡、朝鮮海峡を渡って朝鮮半島に入ると非武装地帯の国境にあたる場所をめざして、ひとつは黒竜江省の三江平原(Three Rivers Plain)、もうひとつは黒竜江省のザール(Zhaiong)に行っている。これまでに至るまでには足環などたくさん付けたがきちんとした情報が得られませんでした。次は、コハクチョウで北海道にはたくさん飛来しますがクッチャロ湖は北から来るものにとっての最初の中継地で、北へ帰る時は最後の中継地になります。首環に発信器を付けての個体がクッチャロ湖を飛び立ち、アムール川河口部やサハリンなどで滞在しながらオホーツク海、マガダンを越えツンドラ地帯まで行くということが分かりました。

それから、オオハクチョウは、北海道東部の屈斜路湖あたりが重要な中継地になっています。観察情報では伊豆沼で越冬するものも北海道東部や石狩川あたりに来て、さらに北上します。やはりアムール川河口部が重要な中継地で、コハクチョウと同じオホーツク海を越えて行きますが、コハクチョウに比べると少し南で繁殖しますが、より広い範囲に散らばっている傾向があります。いづれにしても北海道の各地を経由してこんな渡りをしていることがみてとれます。

これはオナガガモです。全国に普通にいるカモで、東京では上野不忍池でも歩いていると近寄ってきますが、こんな渡りをしています。300羽くらいを追跡していますが、まるでホウキの先が広がっていくように、またハクチョウとは違った渡りの経路ですが、極東地域まで渡ります。ご存じのように、ハクチョウもカモ類も北海道を経由していますが、こういう衛星追跡の調査に貢献しています。

今までは渡りの経路についてみてきましたが、いったいどんなところを旅しているのだろうか。ということで、グーグルアースの画像上に経路を示してみます。赤い点が経路です。ここが秋田県大館市、次が北海道恵庭市、ここが旭川の近くの比布町、そして北端の稚内付近を経由してサハリンと素晴らしいところを通過します。これは氷河地形でたくさんの湖沼がある場所を経由しオホーツク海を越えてマガダン周辺の素晴らしい湿原、さらに北上して繁殖地に行きます。こんな素晴らしい環境でひと夏を過ごしてまた南下して日本に戻ってくるのですが、その鳥が不忍の池にいたりか北海道のどこかで、ということになります。そういう鳥だけを見ていると、こんな素晴らしいところを旅してくるとは想像もつきません。

タカの仲間のハチクマの渡りの話です。ハチクマはハチを主食にしています。ハチの巣を見つけ出して、日本だと地上付近に巣をつくるハチのクロスズメバチなどの巣を掘り起こしてその巣から卵とか蛹、一部は成虫も捕ります。猛烈にハチに襲われるがものともせず、ブスブス刺されても大丈夫。刺されないのではないかという話もあるが刺されます。でも今日は詳しくは話ませんが、化学的に防御機能をもっていて大丈夫なのです。人間ではとても生きてはいけません。そうしたハチ資源が温帯地域では冬の間はないので南に行って越冬するという渡りをします。毎年9月、10月になると日本のいくつかの地域、例えば愛知県の伊良湖岬などを何百、何千のハチクマが南に進んでいくのが分かります。ハチクマは北海道でも繁殖していて北海道からの渡りについてはきちんと調べてはいないけど、これから話す内容とほとんど同じです。これは長野県の観光地で有名な安曇野(ソフトクリームの美味しいところ)ですが、そこを出発したメスのハチクマです。2003年9月19日、西へ進んで東シナ海700kmを越えて中国の揚子江に入って内陸を南下します。10月7日にはベトナム、12日ラオス、13日タイ、と言うように南下してインドシナ半島からマレー半島に行きます。どこまで行くのかと位置と移動に毎日胸をときめかせながら、さらに追い続けるとマレー半島の西側を通過して、シンガポールを経由しスマトラに入って11月9日には以降ジャワ島タシキマレーに到達することが分かりました。安曇野が故郷で繁殖していたので名前を「アズミ」という名前(私が命名)を付けていますが、長野の人は「ウナギ」と呼ぶ。ウナギでは、「ウナギが今クアランプールにいました」ではおかしいので、「アズミ」という名前で人気を博しました。片道10000km、大きな迂回経路です。その後たくさんの個体を追跡していますが、皆同じでまるで空に道があるような感じでマレー半島から分かれてボルネオからフィリピンに行きますが、ここにいくのなら南西諸島から南下すればはるかに時間もエネルギー(お金は関係ありませんが)も楽なのではないか、と思います。実際に今日は余裕がないので言いませんが、サシバは南下します。ですから全然違う渡り経路にあるということが分かりました。春の渡りはこの「アズミ」でみると、2月22日タシキマレーを出発、秋の渡り経路をたどって北上するのかと思っていたところ、ミャンマーのケ



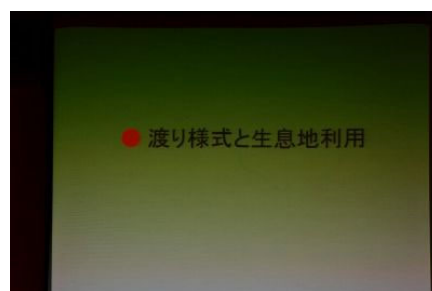
ントン(40 日間)を通して北上し、中国の雲南省(コンメイ)をたどり、行く先はロシアのアムールく  
ら  
いまで行くのかなと思っていたら、ちゃんと戻ってくるのです。山東半島から海を越えて遼東半島、  
朝鮮半島北から朝鮮半島を南下して九州福岡に入り、90 度方向を変えて故郷の長野県の安曇野  
に戻るといふ嘘のような話です。衛星追跡でなければこんな渡りの経路をきちんと全貌明らかにす  
ることは全くできませんし、春の渡り経路でそんな経路があるということは、私を含めても誰も知ら  
なかったことです。

衛星追跡の威力を知ると同時に鳥たちの渡りということが、私たちが考えていることよりはるか  
に複雑な行動であるとうことが分かりました。この帰りも 10000km 以上の渡りであり、往復で 2 万  
数千 km、春と秋の渡りの経路が大きく違うが、終着点は同じで長野県安曇野です。これまで 50 数  
個体も追跡していますが、春の渡りでは皆同じ経路で朝鮮半島経由であり、面白いのは 1~2 週  
間の長期間にわたる中継地における滞在がみられます。おそらく繁殖ということを抑えているので  
栄養をとっているのだらうと思われます。いずれにしても、注目すべきことにハククマは春秋の渡  
りを通じて、東アジアのすべての国を一つずつ通過していくといふことです。

さて、こういうことに関心をもっている人はこの疑問も必ず持ちます。そう、「ハククマが秋と春で  
渡り経路を違える理由」です。大きく迂回するのは何か理由があるのだけど、なんで秋と春で渡り  
経路が違うのかといふことです。いろんな解析をしていますが、違いを生み出す鍵になる主な地域  
は、東シナ海を超えるかどうか、島影のない 700km を超えるのが得策なのかどうか、できるのだら  
うか、といふことです。調べたところ、秋には東シナ海に安定した東からの風が吹いている。ハクク  
マはこの追い風を利用して 700km の海を渡る。しかも上昇気流が発生するので得意な気象条件  
を利用して渡っている。一方、初夏 5 月上旬には、東シナ海とその周辺地域の気候は不安定(梅  
雨前線)で、700km の海上を渡るのは危険、朝鮮半島から対馬経由で 200km 弱の海を渡る方が  
はるかに安全であるといふことなのです(秋と春の気象をアニメーションで説明)。

#### 4. 渡り様式と生息地利用

渡り経路を調べるには大きな実験をしてきていることが  
お分かりいただけだと思いますが、情報は経路を明らか  
にするだけではなく、さまざまな関連情報を提供してくれ  
ています。それを解析することによって、個々の種の様式  
とか生息地の利用のし方が分かってきています。これまで  
ツルの仲間(タンチョウ、マナヅル、ナベヅル、ソデグロ  
ズル、クロズル、アネハヅル)、ハクチョウ類(コハクチョウ、オオハクチョウ)、カモ類(マガモ、オナ  
ガガモ、ヒドリガモ)の鳥たちを追跡してきた中で、たくさんの鳥たちが利用する場所、長期間滞在  
する場所、人間社会では国際空港に相当するものです。飛行機も飛び続けることはできないので、  
エネルギーを補給するような場所をもつが、その場所がどういうところかです。東アジアにおける  
重要な渡来地は、これまでの野外観察や衛星追跡の結果から、中国の三江平原、黄河河口、ボ  
ーヤン湖(揚子江中流域)、朝鮮半島の非武装地帯、金野(北朝鮮)などが重要な中継地であるこ



とが分かってきました。とくに、朝鮮半島の非武装地帯が注目されます(図で説明)。非武装地帯周辺のマナズルの滞在位置は北朝鮮境界の鉄源と板門店で衛星追跡した点が集中しています。ここはツルたちにとって好適な環境があります。これはタンチョウの分布であり、北海道のタンチョウは長距離の渡りはしないが、ここでは数百、数千キロの渡りをします。越冬期のタンチョウもこの地を利用しています。ハンカ湖から南下してマナズルの渡り経路をとって非武装地帯(幅 4km 内)に来ます。韓国寄りの人民統制区域(CGZ:シベリア コントロール ゾーン)があり、タンチョウの滞在位置は南の 1 点を除いて非武装地帯に隣接して綺麗に分布しています。地武装地帯周辺のタンチョウの昼と夜の位置は、日昼は人民東征区域の湿地、田んぼで暮らし、夜は地武装地帯となっています。このように、南北朝鮮を隔てる非武装地帯、国境は渡りの重要な渡来地になっているのです。非武装地帯は、立ち入りが禁止され、経済開発が行われなため、鳥たちにとって安住の地、楽園になっている。北朝鮮と韓国は朝鮮戦争によって国が二つに分断されています。不幸な戦争の結果として非武装地帯が設定されていますが、大変皮肉なことにそこが立ち入りできないことから、鳥たちを含む生きものの安住の地、楽園になっています。人民統制区域、非武装地帯では厳しい検問が行われていて、そうした中でツルたちが平和に暮らしている皮肉な様子が見られます。地雷もたくさん埋まっています非武装地帯そのものが立ち入りできませんが、仮に入るとしても動き回ることにはできないでしょう。ツルはたぶん大丈夫に思います(写真で説明)。

## 5. 鳥の渡りと地球温暖化

これは北半球の 1950~2007 年の年平均気温で、平均値は平年値(1971~2000 年)を使い、それからどのくらいずれているかを示したものです(グラフで説明)。これをみても確実に温度が上がってきています。IPCC の報告(2007)によれば、これまでの 100 年で地球の平均気温は 0.74 度、1 度に満たない上昇を続けているということが分かっています。そういうわずかな気温の変化を、鳥たちがどんなふうを受けているかを調べるには、長年にわたっていろんな情報を集めておく必要があります。

これはコムクドリで、新潟で巣箱を使ったきっちりとした記録ですが、最初に卵を産んだ日を見ると、30 年間、2 週間きれいなパターンで早くなっています。春先の気温と鳥の繁殖時期は大きな関わりがあることは経験的に調べられていて、コムクドリでは春先に気温が高い年ほど産卵時期が早まる傾向があります。ソメイヨシノでも春先の気温に影響を受けて、開花が早くなったり遅かったりしますが、春先の気温が高い年ほど開花は早い。綺麗な曲線であるのは、サクラは地面についていることであり、コムクドリは新潟の気温だけでなく越冬地、中継地の気温を受けながらなので、関係がサクラとは違う。そうした生物季節を変化させるなど、繁殖時期、サクラの開花時期など分かってきています。

これはコハクチョウの越冬数の年変化です。年々日本で越冬する数が物凄い勢いで増えていきます。年によって触れていながらも増えていて、新潟でも似ていて運動していると考えられます。おそらく気温の上昇であると見当をつけて統計的に操作しながら解析を進めていますが、どの気温の影響を受けるかを調べるには、やはりどこに行くのかを調べなくてはなりません。先ほどの

コハクチョウの衛星追跡の結果でも、繁殖地のツンドラ地帯のチェルスキーと、中継地の枝幸、越冬地の新潟の気温がどうなのかを調べました。これは成鳥の生存率の変化に関する影響する要因のモデル選択という複雑な表ですが、越冬地新潟の気温に関係した降雪量、繁殖地や中継地の気温がどう組み合わせって影響するかを調べたもので、それぞれの気温が重要であるということが分かったというものです。ハクチョウはご存じのとおり、子どもが親と一緒に渡ってきて、色が灰色です。だからその年何羽の子どもが生まれ渡ってくるのかが分かります。繁殖地の繁殖時期の気温、幼鳥数を表しますが、繁殖地の気温が高いほど幼鳥が多く生産(誕生)されて、日本に渡ってくるのが分かります。これは、気温は繁殖地、越冬地でどのくらい上昇しているのか、どう変動しているかをみたものです。繁殖地と越冬地の気温をみると、どちらも年が進むにつれて気温が上昇しており、気温は33年間でチェルスキーが3.8度、同じく新潟が2.6度上昇している。先ほどのIPCCでは、これまでの100年で地球の平均気温は0.74度上昇していたが、その平均的な基準からすると繁殖地も越冬地もそれぞれに著しいということがいえます。そうしたことから、コハクチョウの越冬数の変動や増加は、繁殖地や越冬地の温暖化と関係していることがうかがえます。そこで、気温、或いは気温と関係する降雪量がハクチョウの生活にどう影響するのかが問題になりますが、繁殖地の気温の増加は、採食地掘げ(雪や氷を早く解かす)、より多くの食物をもたらす。それが、成鳥の繁殖成功の増加や、成鳥、幼鳥の生存率の増加につながります。また早く雪解けが始まるので成鳥の繁殖開始を早めるので、渡り前までの幼鳥の成長期間が長くなるし、幼鳥の生存率が上昇します。また、越冬地や中継地でも積雪量を減少させ、より多くの採食地を露出させ、成鳥、幼鳥の生存率が上昇し、成鳥の繁殖成功が増加します。以上、これらは推定で、今後明らかにしていきます。

さて、ハクチョウの数が急激に増えて日本のどこに行ってもハクチョウがたくさん見られるということは、バードウォッチャーといわれる人たちにとっては嬉しいことかもしれないし、行政で観光を行っているところは喜ぶかもしれない。でもそれがいいことであるかは別問題であります。生態系というのは相互作用やバランスを保ちながら存在しています。人間もその中でさまざまな自然の恵み受けながら生活をしています。ハクチョウも越冬地、中継地、繁殖地のいろんな影響を受けながら、数を増やしてしまっているということで、他のハクチョウや一部の鳥の数が増えているが、喜んではいられません。ハクチョウの増加によって、繁殖地のツンドラに生態系が変質している可能性があります。問題は、バランスのとれた本来の健全な生態系の維持です。これもこの夏あたりから研究者で検証していこうと相談しているところです。まだこれも推定です。北アメリカでは原因は違うが、ハクガンという鳥がカルフォルニアの農耕地の食糧供給の影響で急激に増加していて、繁殖地のツンドラを脅かしていることが既に明らかになっています。ツンドラの生態系を変質させてしまっているということが、ここでもおきているのです。

## 6. 人と人をつなぐ渡り鳥

鳥たちに国境はありません。鳥はビザもパスポートも持たずにいくつもの国を越えて渡っていきます。ハククマなどは東アジアの全部の国を一つずつめぐってくるということが分かり、渡り鳥は世

界各地の遠く離れた国や地域の自然と自然をつないでいて、また、渡り鳥は、遠く離れた国や地域の人ともつないでいます。世界の各地で、渡り鳥を介した人と人とのさまざまな交流、保全に向けてのいろいろな国際協力が行われています。同じ鳥の群れをいろいろな国や地域の人たちがみえています。



これは長野県の白樺峠、これは愛知県伊良湖岬です(写真)。いわゆるバードウォッチャーではなく一般人で秋の一日鳥が見られても見られなくても、ハチクマであろうとサシバであろうと何であろうと分からなくても、大空を何百何千の鳥が渡っていく、自然の移り変わりを楽しむために集まっている。おそらく白樺峠でみた鳥をここ伊良湖岬でもみる。それをマレーシアのタイピンでもみる。さらにタンジュンでも一般市民の何百何千の人たちが集まってみる。そういった意味で鳥が人をつないでいます。でもそんなつなぎ方ではないいろいろな形での人と人をつなぐ役割をしていることがあります。タカ類などの保全をめぐるなど各地で議論(伊良湖、タイピン、ネパール、ソウルなどの会議風景あり)がかわされることがあります。そうした会議のあとにも各国からの参加者の交流が続きます。このようなことを通じて人と人が交流しつながっているという側面があります。

渡り鳥が遠く離れた地域の人と人をつないでいるという点で、一つのきわだった例があります。それは遠藤公男(1984)さんの児童書向けの本、「アリアンの青い鳥(講談社)」の中に出てくる“幸せを運ぶ青い鳥”の例です。その中の一説を紹介して人と人とのつながりをもつことの話をしたいと思います。

『北朝鮮の著名な鳥類学者、元洪九(ウォン・ホング)さんの末っ子のピョンオーは、子供の頃から父について鳥の観察を行ない、標本づくりを手伝っていた。ピョンオー(炳旣)は1930年の生まれ。日本の占領下、苦しい時代ではあったが、親子水入らずで楽しい日々が続いていた。しかし、朝鮮戦争が始まり、家族はばらばらになる。両親は北に、ピョンオーら兄弟は南に引き裂かれる。その後、引き裂かれた家族は、会うことも手紙や電話で連絡することもかなわなかった。月日が経ち、ピョンオーは南(韓国)で鳥類学者に成長している。林業試験場の職から私立の名門、慶熙(キョンヒ)大学の助教授、のちに教授になる。1964年5月、北朝鮮からモスクワ経由で、一通の封書が日本に届く。科学院生物学研究所からのもので、ピョンヤンのモランボン公演で、日本の足環を付けたシベリアムクドリが見つかったという。日本の足環を付けているが、どこで放したのか教えてほしい、という依頼だった。足環は韓国のソウルで付けられたものだった。付けたのは、元 炳旣さん、そうピョンオーだった。そして、北朝鮮から問い合わせてきたのは、科学院生物学研究所の所長を務めていた元洪九さん、そうピョンオーの父だった。長い年月にわたって電話も出会いも、一切通信が途絶えていた二人がシベリアムクドリの足環をともに触れるということでお互いの安否を知る。父はこのシベリアムクドリの足環を通じて、片時も忘れたことのない我が子が、鳥類学者

に成長していることを知る。息子は、日々、安否を気遣っていた父が、元気に鳥類学者を続けていることを知る。鳥に付けられた足環は、会うことのできなない父と子が、ともに触れたものだった。互いに、どれほど嬉しく、また、せつなかつたことか、二人が、またこの出来事を知った家族が、揺れ動く気持ちの中で、どれだけの涙を流したことか。いまだに南北朝鮮を隔てる非武装地帯。鳥たちは、その境界を軽々越えて行き来する。鳥たちにまさに国境はない。元さん親子を結びつけたシベリアムクドリは、ささやかであったかもしれないが、幸せを運ぶ青い鳥“だった。”

《樋口広芳著(2005)『鳥たちの旅』(NHK 出版)より》

この出来事は当時大きな話題になり、中国、ロシア、日本、アメリカにニュースが伝わりました。それから何十年か経って、既に忘れ去られつつあります。最近、渡り研究を続けていることで再認識するに至り、日本もこれに深く関わっていたわけで、これは後々の世代にまで長く伝えていかなければいけないことだと思っています。

## 7. まとめと課題

- 個々の種の渡り鳥は、それぞれ独自の渡り経路をもっている。渡り経路は、種が同じでも、個体により、季節により、年によって多少、あるいは大きくなる。
- 渡り経路の違いは、採食する食物の分布や気象条件によって異なると考えられる。
- 東アジアの森林や湿地の生態系は、渡り鳥によってさまざまなかたちでつながっている。各地の生息地あるいは生態系は、渡り鳥によって網目状のネットワークを構成していると言える。
- 生息地の具体的なつながりを明らかにすることは、対象種の保全。感染症の伝播、温暖化の影響を考える上で重要。
- 個々の生態系は、それぞれ孤立して存在しているわけではない。近隣のものと、あるいは遠く離れたものと、渡り鳥を介してつながっている。保全を進める上では、地域の視点と地球規模での視点の両方をもつ必要がある。
- 鳥は、渡りを通じて、遠く離れた国や地域の人と人をもつないでいる。渡り鳥とその生息地の保全のためには、国際協力が不可欠。

### 【平和なひとときの写真（1993年6月、ラムサール条約締約国会議後の北海道釧路湿原）】



ツルと湿地の未来国際シンポジウムのエキスカッションの時のひとこまで。中国人、韓国人、北朝鮮人、ロシア人、アメリカ人、日本人(樋口)が写っています。とくに北と南の方、一つに集まって交流を深める、議論するという機会は通常はなかなかできない。でも鳥だから、渡り鳥だから、さらにツルのような平和の象徴、幸福の象徴であるからこそ、こういうことが可能になる。鳥たちがも

つ力、魅力というものが計り知れない。私たちはそうした素晴らしい生きものと付き合っているということを日々私自身信じています。

**【最後のお楽しみと宣伝】**

今までは研究目的で衛星追跡を行ってきましたが、この夏、渡りの様子を一般公開する計画を立てています。リアルタイムで鳥の位置、移動が分かります。また異なる国や地域の人と自然をつなぐ役割もしていて、まさに教育プログラムを通じて渡り経路の人たちがさまざまに交流することを実現させたいと思っています。そのうち、何らかのかたちで公表いたしますので感心ある方は是非アクセスしていただき楽しんでほしいと思います。

どうもありがとうございました。～ *Thank you!*

(おわり)



## 第2部

### パネルディスカッション

#### 『鳥と生物多様性＋(プラス)』

##### <パネリスト>

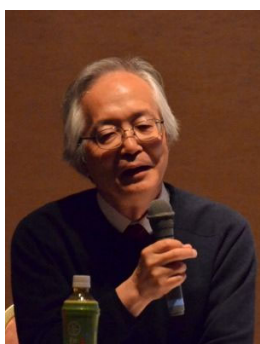
- |         |                         |
|---------|-------------------------|
| 川路 則友 氏 | 独立行政法人森林総合研究所北海道支所長     |
| 小野 宏治 氏 | 環境省釧路自然環境事務所野生生物課長補佐    |
| 武田 忠義 氏 | 北海道環境生活部環境局自然保護課主査      |
| 大橋 弘一 氏 | 野鳥写真家・自然雑誌faura編集長      |
| 樋口 広芳 氏 | 慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授 |

##### <コーディネーター>

- |      |          |
|------|----------|
| 富川 徹 | 野鳥お勉強会代表 |
|------|----------|



## パネリスト紹介（敬省略）



### 樋口広芳（ひぐち・ひろよし）

横浜出身。東京大学大学院農学生命科学研究科教授を経て、現在、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授、東京理科大学客員教授。専門は保全生物学、生態学、鳥類学。日本鳥学会元会長、とくに、人工衛星を利用したツル類やハクチョウ類の渡り追跡研究に深くかかわり、ロシア、中国などでの研究者と共同研究を行っており、この衛星追跡研究では、今日の鳥の保全において様々な有益な結果が得られている。現在もそれらの研究テーマは継続している。



### 川路則友（かわじ・のりとも）

鹿児島出身。九州大学大学院農学研究科博士後期課程修了農学博士で、その後鹿児島大学助手、農林水産省林業試験場、農林水産省森林総合研究所森林生物部、独立行政法人森林総合研究所野生動物研究領域チーム長などを経て、現在の森林総合研究所北海道支所長に勤務される。専門分野は、鳥類学、野生動物学で、特にヤブサメやヤマドリの研究には奥深いものがある。



### 小野宏治（おの・こうじ）

東京都出身。東邦大学大学院を卒業後、北海道に来られてから北海道海鳥センターを経て、現在の環境省釧路自然環境事務所に勤務。タンチョウやエトピリカなどの保護増殖事業などの自然環境事業を担当し、今や北海道の環境行政にはなくてはならない一人である。大学ではスズメ、大学院ではカムリウミスズメの生態について研究する。



### 武田忠義（たけだ・ただよし）

北海道江別市出身。北海道大学獣医学部卒業後、北海道（同庁）に勤務し、主に自然環境関係に携わる。現在は北海道環境生活部環境局自然環境課の生物多様性保全グループに勤務され、北海道の生物多様性保全の推進業務を担当する。子供の頃から生き物好きで、野鳥の会江別支部に中学生のころから入会。野生動物救護研究会で野生鳥獣の救護活動に取り組んでいる。





### 大橋弘一（おおはし・こういち）

東京都出身。早稲田大学法学部を卒業後、楽器メーカー勤務を経て写真家として独立。2000年、現在の(有)ナチュラルーを設立し、自然雑誌“ファウラ”をはじめ、「日本の野鳥」、「北海道の自然」をテーマとして出版物等の編集制作などを行う。「自然ガイド支笏・樽前」(2002 北海道新聞社)をはじめ、「鳥の名前」(2003 東京書籍)などの書籍の出版、日本の重要湿地 500(環境省自然環境局)などの作品提供出版物、写真展(個展)、テレビ・ラジオなどにレギュラー出演など、幅広い活動で自然や生態系保全を訴えている。



### 富川 徹（とみかわ・とおる）

北海道旭川市出身、江別市在住。北海道工業大学中退。たくぎん総合研究所環境調査部を経て、99年から(株)野生生物総合研究所に勤務。鳥類、環境保全及び環境管理計画業務等を担当し、環境調査では現場第一で取り組むことを志す。鳥類標識調査員、日本鳥学会会員、北海道野鳥愛護会会員、野鳥お勉強会代表など。

## 第2部 パネルディスカッション「鳥と生物多様性＋(プラス)」

### 【自己アピール、生物多様性の保全について】

各パネリストから、自身のこと、生物多様性の保全について、宣伝しておきたいことなど自由にお話をもらいました。とくに、小野さん、武田さんには行政の立場から、川路さん、(樋口先生)には研究者の立場から、そして大橋さんにはジャーナリストの立場からお話をいただきました。

(以下敬省略)

川路:

北海道の自然には魅せられたものがありこれからは定住を考えています。私のフィールドは羊ヶ丘の森(札幌)で、仕事場でもあり鳥の研究の場でもあります。

羊ヶ丘は、明治時代に山火事があり、その後に回復しつつある約 100 年の歴史ある林で、シラカンバ、ミズナラを中心にした山火再生林です。

羊ヶ丘の鳥について、私が研究してきた関東(八王子多摩森林科学園)や九州(鹿児島市鳥帽子岳)との種類数の季節変化を比べても、羊ヶ丘(とくに北海道札幌市)は、①春から夏にかけて種類数が多く、夏と冬の種類数の違いが激しい。②記録種は 138 種、夏鳥が多いが、一時通過で見られる鳥も数も多い。③巣を作る場所ごとの鳥の数の割合のバランスがよく、鳥にとって地上やササ環境が重要要素となっています。などの特徴があり素晴らしいところです。

小野:

環境省釧路自然事務所で希少種の保護増殖事業を担当しています。難しくいうと、法律では鳥獣法の希少鳥獣、種の保存法の国内希少野生生物種などがあります。私が学生時代に研究したカムリウミスズメは希少鳥獣ではあるものの、とくに積極的な保護を行ってこなかった種となっていました。今でも海鳥ではアホウドリ、エトピリカ、ウミガラスの 3 種だけが保護増殖事業の対象種で、なぜ、カムリウミスズメは数が少ないのに誰も着目もせず国の保護も行われぬのかと思っていました。

担当の保護に関わる中で、その種だけに終わらせない取り組み、その背景をきちんと守ることが必要なことだと思って、希少種のエトピリカなどを代表選手という感じで捉えながら、いろんな生きものの保護に関わって行きたいと思います。

竹田:

北海道にいろんな生物がいて生物多様性が高い地域と考えています。

生物多様性とは、遺伝子の多様性、種の多様性、生態系の多様性があります。このそれぞれの固有性つながり生物多様性といい、3つのレベルで捕えることができ、その自然の恵みを生態系サービスとして使われています。

北海道では、生物多様性基本法(平成 20 年)の制定及び生物多様性条約 COP10 の開催(名古屋)などを受けて北海道生物多様性保全計画(平成 22 年 7 月)を策定しました。北海道はまだ

らかな山麓斜面や広大な原野があり、湿度が低く冷涼な気候、本州と大きく異なる動植物相であるといいながら、明治以降、人口増大などの社会の変化、動植物の生息・生育環境の減少等の変化がみられ、背景として北海道の生物多様性に影響を及ぼしていると考えられます。本計画は、生物多様性の保全と持続可能な地用の視点で自然環境に係わる取り組みをまとめ直すものであり、今後の目標と方針を示して取り組んでいます。課題は、普通の種・環境、環境の連続性、生態系のバランスをどう保全するかなどがあげられます。

大橋：

野鳥写真家で、業務上一般向けの本などに提供することなどの仕事をしています。生物多様性ということでは「北海道野鳥観察地ガイド」と、その姉妹版で先に出した「図鑑北海道野鳥ハンディガイド」(共に北海道新聞社)が思い当たります。これらの取材で1年の間に10～15年ぶりに訪れるという約100か所のガイド地を見て回り、新しく追加した探鳥地(20～30か所)も入れた最新情報本を目指しました。その中で久しぶりに訪れて鳥が少なくなったと思う場所が非常に多く、本来、鳥を見る場所が工事現場になっていたり見る場所ではなくなったり、見た目に環境が変わっていないよいい見えても、ずいぶん鳥が減ったと思っています。鳥を見る、写真を撮るという行為から、生物多様性の概念の種の多様性にポイントをおき、また趣味として鳥をみる人の立場にたつて考えると、種類と個体数の多いことが大事だと思います。自然がどういう関わりであるかを知る、健全な状態であるためには我々は何ができるか、を考えるにはこの趣味のいいところであるといえます。いずれにしても、探鳥地を見て回った時に20年前と今ではこんなに状況が違うことに愕然とし、そこから鳥と生物多様性のことを考えざるを得ないという立場になっていました。



### 【希少種の取り組みについて】

生物多様性ということでは、とりわけ希少種が注目されますが、北海道でも希少なタンチョウやシマフクロウなどの保護という観点での取り組みについて現状をうかがいました。

小野:

樋口先生の講演で渡っているタンチョウの映像をみていいなと感じました。北海道のタンチョウももともとは渡っていたと思われていて、昔は東京のお堀までタンチョウが渡っていたということがあり浮世絵にも描かれています。各地でみられたが乱獲や生息地の開発などで、一時は数十羽まで減ったということがありましたが、その後地域の給餌により増えて現在 1,462 羽(タンチョウ研究グループ調査)までに回復しています。確かに



に 1,000 羽を超えましたが問題があり、実際中身は給餌に依存となっていて、冬になるとわざわざ寒い釧路に帰ってくるという、鳥としての生き方が誤っています。誤りのきっかけは人間です。これがもとに戻れるかとなると難しいのです。今後は給餌に依存しない自然状態で安定的に存続できればと考えています。どの種も同じですが、一つの種にとどまらず種をみつめて全体の保全ができたらと思います。昨年、一昨年にタンチョウの生息地分散アクションプランを保護増殖事業計画に基づいて作り、20 年かけてタンチョウを分散させようと、緊急と思って取り組んでいます。現状分からないことが多いのですが、分かってから走るのか、走りながら考えるかではありますが、後者の方法で試行錯誤進めています。

シマフクロウは、絶滅に危機していたが関係者などの給餌巣箱の設置等の協力でようやく 140 - 150 羽の微増ではありますが、これからも研究者の協力を得ながら、生息地回復の計画地づくりを行うという入り口に入ったところです。

### 【北海道の自然保全と取り組み方向は】

北海道における生物多様性の保全に向けて、「現状をどう捉え、どう考え、そしてどう行動していけばいいのか、そして私たちは何ができるのか」など、可能な限り具体的な提案を含めてうかがいました。

川路:

森林の鳥についての生活、生息状況、環境を追いかけていますが、生物多様性ということでは群集的な見方をしたほうがいろいろともの言えるのかもしれませんが。先ほど夏鳥が減少しているというけど、減少している根拠をいうにはデータが必要だと思います。まさしく行政のほうから施策をとるにもやはりデータが必要です。そうした見方でデータをとってきた事例が少ないといえますし、見られやすい種でもデータが少ないのが現状です。



ヤマシギ、ウズラ 道では問題されませんが、本州では問題にされていないものの、感心がある鳥です。ウズラの減少は数年前から言われていてどこが原因で少なくなっているかの話を聞くと、本州は越冬場所、北海道は繁殖なのかといったこともよく分かっていません。1930年代にかなりたくさんいたところに足環を付けて放したデータが未だにものを言っています。これは貴重なデータであるが古く、数十年前に少なくなっていると言いつつも、何も進歩していないという現実

があります。ヤマシギも少なくなっているというのはハンターの話です。夜行性でもあり調査も難しいのですが、鳥をみる人が増えているのに、鳥に対する正確な情報が増えてこないのは問題です。決まった鳥の情報はあっても身近な鳥でもゆとりをもったデータがほしいし、きっとそれらは行政施策にも反映すると思います。データを集めてうまく利用するシステムがあれば、北海道の生物多様性に正確なデータと根拠が得られると思われ期待したいところです。

樋口：

シマアオジやウズラが減少している話があって、私も気にして幾つか論文は書いたことがあります。ひとつはデータを整備して解説することが求められていることです。データがないことはないが、気づかれずに埋もれていることがあるので、発掘することもポイントと思われれます。九州の人で1日も欠かさず2年間くらい鳥の観察を記録しているというが、これは行政や研究者では無理で、関心があってやる人はできるのです。北海道独自のシステムでもデータの蓄積が必要であるし、環境省や野鳥の会が考えている事柄もあります。北大の研究者で、データをどう集めて解析し、どう行政に生かしていくかのいい考えを持っている先生がいるので別の機会に話してもらいたいと思います。

先ほども言いましたが、地域の事柄を問題にする時に、地域だけでは収まらないことが多いといえます。とくに、渡り鳥はまさにその研究であり、国内だけの情報だけでなく渡っていく先々の情報を集めていく必要があると思うし、本州、中国、東南アジア、その他のどう集め、どう連携しながら突き止めていくのかなどが必要です。北海道のことは北海道で考え処理していかなければなりません。同時にそういう国際的な連携のなかでデータを集め解析し、それに基づいて地域の保全対策を立てていくのが必要で、そういう視点をきちんと持つことが大切と思われれます。東アジアでは言葉の問題などがあって難しいが、それなしにたぶん解決しないと思います。言葉が通じなくても好き者同士で感心があれば分かり合えるところがあるので、違った地域との交流でお互い行き来することを含めた視点と経験を増やすことが求められます。

川路：

基本的には至近的な考えとして調査ということを念頭において話します。決まったやり方決まっ



た期間、決まった場所で行うと非常に使えるデータになります。その意味では、市民の集まりの中でどれくらい可能なのかといえます。昔は野鳥の会の全国組織でツルの一声的に行われたこともあり(例:繁殖鳥調査、越冬期調査など)、方法論的には確立したものがありました。今、エゾライチョウやウズラなどについて、環境省などに調査をやろうと持ちかけても手が回らないことが多いといえます。まずは北海道からと思うし、先日エゾライチョウのことで道議会でも話題にあがった例もあるように、どんな雰囲気であるのかを確認をしたいし、また、例えば団体などの申し入れがあれば予算につながるというシステムがあるのかなど。実現可能性を問いたいところです。

竹田:

川路さんのあった、何ができるかについては、普段からざっくばらんに情報交換をお願いしたいということです。すなわち、自然についてよく分かっている人でなくても、私たちにはこんなことができる、こんなデータがある、堅苦しい要請でなくてもこんなことができるのではないか、時間をつくって話を聞いてほしい、集まりがあるので来てほしい、呼んでほしいなど、気軽に言っていただきたい。身近なコミュニケーションの場が昔に比べて極めて少なくなったことが残念に感じています。もっともっとやりとりしたいです。



もうひとつ、行政担当でも計画などの審査を行うが、何が大切なのか、だれが求めているかなど、聞かれても説得できないことがあります。皆さんが言っているように、道議会でこんな質問がでた、となると世の中が動いてきます。一人ひとりが回りを巻き込んで活動すること、参加すること(アクション)があればやりやすいと思います。

小野:

行政のなかでできることできないことがあります。種の保存法などでやっているタンチョウやウミガラス、エトピリカなどで取り組んでいます。例としてカムリウミスズメは対象種にはなっていないので直接は手をだせない現状があります。でも、間接的には手を出せたり、出せなかったりもしますが、直接手をだけなくとも、例えば混獲防止の取り組みということで共通課題としては解決できるものがたくさんあります。そうしたものに着目しながらやりやすい環境を回りでつくってくれれば、環境省でも入っていけると思われます。できるだけ全ての種を守りたいのですが、予算には限りがあるのでどうしても着目しなければならないようになってしまいます。軸があていければ可能と思います。

大橋弘一:

一般の人ということで話します。とくに写真撮る人がデジタルになって物凄く増えました。珍しい鳥が出たと聞くとインターネットなどで情報が出回り、そこにわんさか人が押し掛け、年々ひどくな



っています。そこに集まってくる人のなかには今自分が撮ろうとしている鳥がどんな鳥なのかの知識もなく「何か騒いでいて珍しいようだよ、たまには鳥でも撮ってみるか」という人もいるように聞く。また長年鳥を撮っている人でも、種類数を増やすことのコレクション的に写真を撮っている人も多いようで、そういう人にはとくに珍鳥ものばかり写っていることが多く、一方で普通種への目が少なくなっていると感じています。具体的に少なくなったと思われるシロチドリをスライドでみてみましょう(写真)。普通種だけど、最近この鳥をみないと気が付きます。例えば「この海岸でミヤコドリがでているよ」というと、そればかり見る、撮影する人が集まって、足元にいるシロチドリに目もくれないということがあったので紹介しました。鳥を趣味にしている以上、コレクション的にライフリストを増やすという方向だけでいいのか、趣味だから強制できませんが社会に貢献できる道があるとするれば、珍鳥だけを目を向けないという姿勢をもつことが大事であると日頃から感じています。

#### 【質疑応答(会場の声)】

これまでのディスカッションを通して、会場(参加者)から意見や質問を聞きました。

上田(参加者):

ハチクマなどの大型の鳥は衛星追跡で渡りのルートが分かってきたというように、例えば、技術的なことで体重の4%まではOKであるとのですが、アカモズなどの小鳥類については発信器などを付けて長期間にわたる長距離追跡は可能でしょうか。

樋口:

技術の進歩は日進月歩です。日本は科学技術立国でその関連技術の面に大きく貢献できる可能性があるが、今小鳥類に貢献できているわけではありません。衛星追跡ではないのですが、ジオロケータという小さな機器類の利用が日本や世界で利用され広がってきつつあります。いろいろな大きさがあり、小さいものでは0.6g(1円玉の半分くらい)で可能になってきていて、コムクドリ、ヒヨドリ、ツグミ、カンムリウミスズメなどに付けられます。ジオロケータは日照時間が世界各地で微妙に違うことを利用して調べるもので、凡その足どりを追うことができます。ただ、位置の精度が極めて悪く、アルゴスでは誤差が1kmと言いましたが、ジオロケータは100、200kmの誤差が簡単に出てきます。それでも、日本で繁殖するアカモズが東南アジアのどこに行っているのか、大まかにどう渡ってくるのかは分かります。最近、ブッポウソウ、クロツグミ、ムクドリなどではだいたいの足どりが分かってきました。ジオロケータはイギリスの技術だけど、我々は独自で別のシステムを開発しようと思っています。いろいろなやり方、いろいろな考え方ができる可能性があるので、やがてサンコウチョウ、キビタキ、シマアオジにも付けて追跡できる時がくるのではないのでしょうか。おそらく小さいチップのようなものが出てくると、今広く行われているバンディング(標識調査)のあ



り方も大きく変わるでしょう。大量に付けていい情報継続的に得ることができる時代がいずれ来るといいます。

今研究者で進めているのは異分野の方との共同研究があげられます。日本は科学分野が得意であるので、技術をもっている人がかなりいて環境問題に貢献したいと強く思っています。皆さんもそういう人たちを発掘し、仲良くなって小鳥類を安全に追跡できる開発などに加わっていただきたい。

希少種など鳥の保全を進めるには、鳥だけ調べてもダメで、生物多様性ででたが遺伝種レベル、種レベル、生態系レベルの3つがうまく噛みあって、はじめて希少種の保全ができるのです。異分野との連携や共労と言いましたが、鳥たちの棲んでいる環境、生物間の相互作用を一連の事柄を調べられるような考えや方法を身に着けることが大切です。皆さんは鳥のことには詳しいでしょう。もうひとつ生態系のいなかの鳥の位置、他の生きものとの相互関係のなかで生きていることを認識しながら、その情報も合わせて収集・活用していく必要があると思います。幸い北大をはじめ、酪農学園大学、帯広畜産大学などで若いひとが育ってきているので、若い力とプロのいい面をつなぎ合わせて、いい自然環境、生物多様性の保全に向けて活動を展開してほしいと願っています。

#### 【捕捉意見など、こんなこともできたらいいな…】

北海道での取り組みが、まだ出尽くした感はありませんが、最後に会場も含め補足としての意見などをうかがいました。

#### 川路:

バンディングの話がでたので一言いいます。鳥類標識事業で毎年 20 万羽が標識されています。日本での調査は春と秋の渡りの時にたくさん付けるのが普通ですが、イギリスやアメリカでは繁殖期に足環を付けてどこに行くか、環境の変化によって、足環が目的ではなく捕獲して個体数変動をみるなどの調査が行われています。こうしたことでは日本は遅れていて、繁殖期に鳥を捕獲するのはとんでもないと言われていました。しかし、最近は山階鳥類研究所を中心に繁殖期鳥を決まった方法で決まった場所で、決まった期間に網を張り捕まえ、環境変化、鳥の個体数変化などを調べてみようという動機も少しずつみられてきています。そこで羊ヶ丘でも 20 年調査をしてきたが、以下に効率が悪いかを紹介しておきます。20 年で 51000 羽、そのうち他で捕まったデータ(RC)は、30 例(0.06%)、それも点と点なので、非常に確率が悪いのです。渡りのルートを知るためだけの方法で足環を使うというのは効率的に悪いといえます。捕獲したことによって得られるデータは、他にも鳥がどれだけ長生きするか、いついつどこでというデータが得られます。例えば、羊ヶ丘で面白いのは、7年前に付けたコルリ(オスの成鳥で 2 歳以上の個体)が再び捕獲され、おそらく 9 歳の鳥であろうということが分かりました。必ずしも渡りコースを調べるということだけで足環が



使われるということではないのですが、貴重なデータも得られています。道内には 50 数人のバンダーがいますが貴重なデータが溜まりつつあります。

(会場からの意見などはない)

川路:

竹田さんの北海道の施策の話のなかで外来種のことがありましたが、アライグマの凄さを経験したので報告しておきます。羊ヶ丘では中型哺乳類ではキツネ、タヌキ、テンなどがいますが、本来いなかったアライグマという木に登れる動物が入ってきました。経験したのはクロツグミの巣が引っぺがされ下され、木には点々と足跡が残っていたことがあり、またもっと驚いたのは、アカゲラの巣穴(3~5m)の入り口部分が歯で齧られて広がっていたことです。おそらく雛を引っ張り出したものと考えられます。これは先ほどの異分野ではありませんが、生態系のなかで鳥に対する脅威、アライグマは幅を利かせることによって生態系がどう変わるかを注目していく必要があります。このように、とくに森林性の鳥類については脅威になります。アライグマについてのこんな情報、目撃などがあつたら是非ご一報いただきたい。

【まとめ】

富川 :

私なりに、生物多様性とは、いきもののいる空間に我々があって、ともに持続して生き続けることと解釈しています。もちろん、種、遺伝、地域などといった総合的な考え方が必要であると思っています。

今日は鳥を中心に話をしてきましたが、鳥に限らず様々な生きものにおいても一緒に考えて行かなければと、気持ちを新たにしたところです。生物多様性の

意味合いや内容は広く、これだという結論的なことはいえませんが、冒頭の話でもあつたように「どう捉え、考え、行動していく」というプロセスは、まさに今日ここにお越しの皆さん一人ひとりの考えを束ねて行動していくことだと、話が進むほどに強く感じました。そのためにも、もっと多くを話し合っていかなければならないと思います。

言ってみれば、今進めている国や道の取り組みをもとにして、私たち市民、道民が思っている考えを提示しながら、生物多様性を意識した行動に変えていくことだと考えます。例えば、今日は野鳥愛護会の方も多くみられますが、鳥から言えば、北海道野鳥愛護会の会報「野鳥だより」などの記録も日本鳥類目録へのデータとして利用されていると聞きます。そうしたことで探鳥会の鳥合わせの記録もモニタリングということでは十分に活用できる、と思っています。

今日の話はテーマ内容も大きく、まさに多様で難しさを感じないわけにはいかないと実感しますが、とりわけ北海道の豊かな自然に生息する野鳥や動物のことをもっと考え、真に自然と共生す



る社会を築いていくことを願わずにいられません。この野鳥お勉強会でも、機会を見てそうした話しをもっと続けていければと思いますが、皆さんも参加して一緒に考えていただければ幸いに思います。

最後に、このディスカッションの進行及びまとめなどについては、至らぬ点が多々ありましたことをお詫びいたします。また、このイベントについては、ホームページで扱うとともに報告書を作る予定ですので、その中において本日の内容を可能な限りまとめたく思います。ご理解の程よろしくお願いいたします。

本日は、樋口先生、パネリストの皆さん、そして会場の皆さんありがとうございました。

(おわり)

## あとがき

この記念講演会&パネルディスカッションの開催は、財団法人・北海道新聞野生生物基金の助成を受けて実施することができました。ここに北海道新聞社野生生物基金の皆さまに厚くお礼申し上げます。

また、開催にあたっては準備から後片付けまでとお手伝いをいただいた実行委員及びスタッフの皆さま、関係の皆さま、そして何より参加された多くの皆さま方のおかげがあって、このように無事開催を終えられたこと、あらためてお礼と感謝を申し上げます。

300 回記念開催ということもあり、報告書は少し豪華な記念誌を意識したものも目指していたのですが、うまくは進まなかったのが悔やまれます。この悔しさは今後の開催を重ねながら、さらに大きな喜びにつながるものへと引き継ぎたいと思います。ありがとうございました。

野鳥お勉強会 第 300 回記念講演会 & パネルディスカッション  
報告書

平成 25 年 3 月 27 日 印刷・発行  
野鳥お勉強会



# 資料

開催資料  
配布パンフレット  
案内チラシ  
新聞記事(関係分)



野鳥お勉強会 第300回  
記念講演会&パネルディスカッション



平成24年6月16日（土） 於 札幌サンプラザ

野鳥お勉強会

# プログラム

開会 (14時) 松山 潤 日本野鳥の会江別支部長

第1部 記念講演『鳥の渡りと生物多様性の保全』 (14時10分)

開会挨拶 富川 徹 野鳥お勉強会代表

講演者紹介 松山 潤 日本野鳥の会江別支部

講演 樋口 広芳 氏 慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授

第2部 パネルディスカッション『鳥と生物多様性+ (プラス)』 (15時45分)

## <パネリスト>

川路 則友 氏 独立行政法人森林総合研究所北海道支所長

小野 宏治 氏 環境省釧路自然環境事務所野生生物課長補佐

武田 忠義 氏 北海道環境生活部環境局自然保護課主査

大橋 弘一 氏 野鳥写真家・自然雑誌faura編集長

樋口 広芳 氏 慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授

## <コーディネーター>

富川 徹 野鳥お勉強会代表

第3部 記念祝賀会・交流会 (17時45分)

主催者挨拶 富川 徹

お祝いのメッセージ

乾杯 小堀 煌治 北海道野鳥愛護会会長

フリースピーチ

ギター演奏 たなか よう 北海道野鳥愛護会

閉会の挨拶 樋口 孝城 石狩鳥類研究会代表

閉会 (19時50分)



## 鳥の渡りと生物多様性の保全

樋口 広芳(慶應義塾大学政策・メディア研究科)

鳥たちは「旅」をする。私たち人間も、旅をする。人の旅は、楽しみの旅であり、仕事の旅である。鳥の旅は、雪と氷に閉ざされる世界から逃れる旅、あるいは、より多くの食物を求めての旅。いずれにしても生活をかけた旅である。そこには、楽しみといった要素はないように思われる。

旅には目的地があり、戻ってくる場所がある。この点は鳥も人も同じである。しかし、鳥たちは、その生活をかけた旅、渡りを毎年毎年、決まった季節に繰り返す。ある鳥はシベリアと日本の間を、別の鳥は東南アジアと日本の間を、また別の鳥は日本を經由してシベリアとオーストラリアの間を行き来する。そうした長旅を、何百万、何千万もの鳥たちが行っている。鳥の旅は、まさに地球規模での季節的な大移動なのである。

なぜ鳥たちは、そんな長い距離を毎年移動するのだろうか。どこをどう通って目的地に着くのだろうか。春の旅と秋の旅で移動する経路は違うのだろうか。鳥によって目的地や経路が違うのはなぜなのだろうか。移動の経路をどうやって見つけ、目的地に到達するのだろうか。

鳥の旅、渡りは、私たち人間に大きなロマンを感じさせるとともに、いろいろな疑問を抱かせる。鳥の渡りの研究は長い歴史をもっているが、具体的な渡りの様子が解明されるようになったのは、比較的最近のことである。渡りの経路などをめぐる研究が飛躍的に進んだのは、科学技術の進歩のおかげである。とくに、人工衛星を利用した渡りの追跡が可能になって以来である。衛星を利用した追跡研究によって、今では鳥の渡りの様子が手にとるようにわかる。しかも、鳥たちが移動している時間からそう遅れることなく、地図上であとをついていくことができる。

私は20年ほどの間、衛星を利用した渡り鳥の追跡研究にたずさわってきた。それは感動の15年であり、興奮の連続の毎日だった。渡りの謎はわかればわかるほど興味深く、また奥の深いものだった。学問の常識では理解できないことがらも、数多く見つかった。

本講演で私は、これまでの研究の成果を3つの角度から紹介したい。一つは、旅そのものを紹介することである。ここでは、いくつかの鳥を対象に、彼らがどこからどこへ、どのような道をたどって旅をするのかについてのべていく。日本から北上する鳥、日本へやってくる鳥、日本の国内を旅する鳥、ヒマラヤを越える鳥、東南アジアを歴訪する鳥などが紹介される。

二つ目は、旅のあり方を探ることである。大人と子供の鳥の旅の違い、親子の別れ、旅の失敗事例、迂回経路をとる理由などについてのべることになる。三つ目は、渡り鳥の保全にかかわることである。長い旅をする鳥たちは、近年、減少傾向が著しい。どんな鳥がいつ頃から減ってきたのか、減少の原因は何なのか、研究は対象種の保全にどのように役に立ってきたのか、などについてのべる。朝鮮半島の非武装地帯が、渡り鳥をはじめとした野生の生きものの保全上、重要な役割を果たしていることも紹介する予定である。

渡り鳥は文字通り、世界の自然をつなぐ旅をしている。皆さんも、この講演の中でそうした旅を実感していただければ幸いである。

# 野鳥お勉強会 開催目録

Ver 10. 3

〈回〉	〈年月日〉	〈話 題〉	〈 話題提供者 敬称略 〉
1	1987. 5. 9	身近な野鳥に関心をもとう ー日本列島セキレイの動きー	柳沢 信雄(愛鳥教育研究会)
2	6.13	野鳥の調査方法について	富川 徹(たくぎん総合研究所)
3	7.11	森にあそぶ ー自然の楽しみ方ー	三木 昇(野生生物情報センター)
4	8. 8	飛翔に憧れて ー現代の航空機ー	田中 隆三(ニッキン札幌支局)
5	9. 2	鳥類標識調査の方法と功績	三浦 二郎(樽前自然教育研究所)
6	10. 3	野鳥撮影の苦心あれこれ	林 大作(さっぽろ撮影社)
7	11.14	街に進出する野鳥たち	島田 明英(野生生物情報センター)
8	12. 5	野鳥の民話を聞く	武沢 和義(北大工学部)
9	1988. 1. 9	絵画と野鳥	谷口 一芳(全道展)
10	2.13	サンクチュアリを訪れる野鳥と人々	大畑 孝二(ウトナイ湖サンクチュアリ)
11	3.12	鳥見人を見る	住友 順子(野生生物情報センター)
12	4. 9	狩猟鳥の移り変わり	富沢 親(北海道猟友会)
13	5.14	山と鳥と	熊木 大仁(風雪社)
14	6.11	傷つき病んだ鳥を救おう	森田 正治(森田どうぶつ園)
15	7. 9	北の魚と磯の観察について	豊島 貢(たくぎん総合研究所)
16	8. 6	草創期の愛鳥教育	田辺 二郎(三里塚小学校)
17	9.10	英語における鳥名のあれこれ	犬飼 弘(とわの森三愛高校)
18	10. 8	自然に魅せられ転職に	勝又 孝(アートアルファ)
19	11.12	報道される珍鳥たち	小堀 煌治(北海道新聞社)
20	12.10	北海道の野生生物情報	小川 巖(野生生物情報センター)
21	1989. 1.14	薬用とされる鳥たち	道川富美子(上村漢薬堂)
22	2.18	自然公園とスズメバチ	畠山 俊雄(北海道野幌森林公園事務所)
23	3.11	北海道の鳥獣保護行政	岡田 幹夫(北海道保健環境部自然保護課)
24	4. 8	珍鳥をスライドで見る	山田 良造(野鳥写真家)
25	5.13	北海道のヒグマ事情	河原 淳(とわの森三愛高校)

- 26 6.10 宮島沼のガンを見続けて  
星子 廉彰(当別高校)
- 27 7.15 せせらぎウォッチング  
酒井 健司(たくぎん総合研究所)
- 28 8.12 余市周辺の野鳥と撮影マナー ―スライドを中心に―  
赤石 誠二(野鳥写真研究家)
- 29 9.9 キノコよもやま話  
伊達 佐重(栗山植物同好会)
- 30 10.14 夜空に輝く野鳥たち  
小畑 淳毅(北海道野幌森林公園事務所)
- 31 11.11 高校における理科 I (生物)の授業と野鳥  
戸津 高保(札幌商業高校)
- 32 12.2 野生生物保護対策の現状 ―鳥類から―  
梅木 賢俊(北海道保健環境部自然保護課)
- 33 1990.1.19 中国の野鳥教育 ―中国愛鳥交流視察から―  
柳沢 信雄(愛鳥教育研究会)
- 34 2.10 団地における小鳥の村  
木内 栄(札幌市役所)
- 35 3.10 野幌原始林の復活  
瀬口 忠一(野幌森の新聞)
- 36 4.7 春の草花あそび  
丸山 博子(野生生物情報センター)
- 37 5.12 北海道の野鳥観察記録  
富川 徹(たくぎん総合研究所)
- 38 6.9 昆虫の観察と楽しみ方  
堀 繁久(北海道開拓の村)
- 39 7.14 オオムラサキとまちおこし  
高橋 慎(栗山小学校)
- 40 8.11 屯田防風保安林と自然教育活動  
上坂 登(新琴似緑小学校)
- 41 9.8 キツネたちのゆくえ  
平井百合子(キツネハウス)
- 42 10.13 道内探鳥飛び歩き  
小山 政弘(苫小牧西高校)
- 43 11.10 ネイチャーゲーム  
高田 雅之(北海道保健環境部自然保護課)
- 44 12.8 アルパインガイドと北海道の自然  
伊東 裕二(NTT北海道)
- 45 1991.1.12 地球にやさしい土の話  
関谷 長昭(北海道農業試験場)
- 46 2.9 栗山の鳥、あれこれ  
沼野 正博(栗山おっとりクラブ) 於栗山町
- 47 3.9 シンポジウム「クマガラの棲める森を考える集い」  
懇親会と共催(会場:北電北2条クラブ)
- 48 4.13 モエレ沼付近の標識鳥類  
猿子 正彦(札幌東保健所)
- 49 6.8 庭にくる野鳥の観察から  
金上・長井(北海道野鳥愛護会)
- 50 7.13 世界環境の危機と森林の衰退  
油津 雄夫(北海道野幌森林公園事務所)
- 51 9.14 雪の結晶から  
原田 素子(NTT北海道)

52	10.12	北海道の自然にふれて	楊 坤(北大留学生)
53	11. 9	札幌米里地区の野鳥のゆくえ -オオジュリンの記録から-	渡辺紀久雄(パンダクラブ北海道)
54	12.14	森を育てる -自然のしくみの生かし方-	大友 健(北海道ボランティアレンジャー)
55	1992. 1.18	サハリンの自然に思う	河井 大輔(ライズ出版部)
56	2.15	野幌森林公園のクマゲラ	松山 潤(HBC興発)
57	3.14	スウェーデンの晩夏から冬	高橋 朝子(工房開所準備中)
58	4.11	札幌の都市鳥を考える	バーバラ・アンドレ(元北大環境研)
59	5. 9	ネパールの人と自然	小澤 久(北大低温研)
60	6.13	函館山の野鳥と渡り	佐藤 理夫(市立函館博物館) 於函館
61	7.11	釧路の自然保護	深沢 敬(北海道野幌森林公園事務所)
62	8. 8	ムクドリとカラスの生活を追って	竹中万紀子(北海道東海大学講師)
63	9.12	アジアの自然と農業開発	石川 尚(北海道開発コンサルタント)
64	10. 9	野鳥と音楽	織田 敏雄(日本野鳥の会札幌支部)
65	11.14	鳥と灯台	小山 政弘(自由ヶ丘学園)
66	12.12	ユーラシア大陸横断見聞記 -鳥と花と-	永安 芳江(北大大学院環境研)
67	1993. 1. 9	根釧原野のハクチョウと我が家の鳥	金沢 裕司(標津高校)
68	2.13	4,000 キロ雁渡る -小さな沼とシベリアと-を取材して	国本 昌秀(北海道テレビ)
69	3.13	ニワトリは鳥になる?	村上 順一(平飼養鶏経営)
70	4.10	ガラパゴス諸島見聞録	荒川 昌伸(室蘭野鳥の会)
71	5. 8	北海道のアオサギ	松長 克利(北大大学院環境研)
72	6.12	野幌森林公園 -自然公園と諸問題-	芹沢 裕二(酪農学園大学)
73	7.10	ホタルの舞う姿夢見て	西脇 昭夫(江別市教育委員会)
74	8.14	西岡水源地の野鳥を語る!	山田 三夫(HBC映画社)
75	9.11	バードサンクチュアリ・あれこれ	原田 修(日本野鳥の会ウナイ湖サンクチュアリ)
76	10.16	コムケ湖の鳥はどこから来るか?	大館 和弘(もんべつかいはずくらぶ)
77	11.13	南極大陸の自然	藤井 純一(南極越冬隊員)
78	12.11	写真講座 野鳥飛ぶ!	

			新城 久(北海道野鳥愛護会)
79	1994. 1. 8	チゴハヤブサの生態に迫る	
			大橋 弘一(日本野鳥の会札幌支部)
80	2.12	鳥と木の実	
			五十嵐 博(ムーブ植物設計)
81	3.12	大雪の花と	
			田中 厚(厚別中学校)
82	4. 9	ボルネオの熱帯雨林と昆虫	
			安細 元啓(たくぎん総合研究所)
83	5.21	森の推理ゲーム	
			鈴木 利典(エコ・ネットワーク)
84	6.11	希少種鳥類の保護について	
			幌村 幸司(北海道野幌森林公園事務所)
85	7. 9	傷病鳥の救護活動日記	
			盛田 徹(日本野鳥の会苫小牧支部)
86	8.20	宮島沼のマガンは今！－保護における問題点とその現状－	
			草野 貞弘(雁を保護する会)
87	9.17	街の中の鳥や生きものたち	
			足立 英二(街の写真家)
88	10.15	わたしの海外バードウォッチング法	
			日向 まり(日本野鳥の会札幌支部)
89	11.19	北方の両生類・爬虫類と鳥たち	
			竹中 踐(北海道東海大学)
90	12.17	春、天売島を訪ねて	
			島 健(税理士専門学校)
91	1995. 1.21	野鳥写真の撮り方と見方	
			松野 有秀(星硝株式会社)
92	2.18	利尻の鳥類	
			小杉 和樹(利尻島自然情報センター)
93	3.18	堀株川河口の動物たち / (兼座談会)	
			富川 徹(たくぎん総合研究所)
94	4.15	香港探鳥アドバイス	
			小畑 淳毅(北海道十勝支庁)ほか
95	5.20	藤の沢愛鳥活動の変遷	
			梶浦 孝純(藤の沢小学校)
96	6.17	ネズミとザゼンソウの関係について	
			和田 直也(北大地球環境研)
97	7.15	ヤブサメの生活	
			川路 則友(森林総合研究所北海道支所)
98	8.19	野生報道の傾向と対策	
			山本 牧(北海道新聞社)
99	9.14	すぐれた自然地域の鳥たち	
			富沢 昌章(北海道環境科学研究センター)
100	10.21	アフリカの野鳥を訪ねて(100回記念講演会)	
			竹田津 実(作家)
101	11.18	円山動物園の鳥たち	
			白澤 昌彦(円山動物園)
102	12.16	猛禽類を追い続けて	
			船造 淳一(日本野鳥の会札幌支部)
103	1996. 1.20	東アフリカの自然と人々の暮らし	
			中川 晃(道央市民生協)
104	2.17	環境調査のなかの鳥たち	
			三浦 和郎(北海道開発コンサルタント)

105	3.16	カナダの国立公園と野生動物	吉中 厚裕(環境庁自然保護局)
106	4.20	シマフクロウの生活	早矢仕有子(北大農学部)
107	5.18	野ネズミと寄生虫の自然史	浅川 満彦(酪農学園大学獣医学部)
108	6.15	野幌森林公園のエゾフクロウ	宮城国太郎(酪農学園大学)
109	7.13	天売島の海鳥たち	林 英子(北大農学部)
110	8.17	ササと鳥	川路 則友(森林総合研究所北海道支所)
111	9.21	水生昆虫の生活史	張 裕平(たくぎん総合研究所)
112	10.19	もし、ヒグマに出会ったら？	河原 淳(たくぎん総合研究所)
113	11.16	中国のトキ事情	柳沢 信雄(北海道野鳥愛護会)
114	12.21	野鳥とりどり -スライド'映写会-	佐藤 幸典(日本野会の会札幌支部)
115	1997. 1.18	恐竜発掘に参加して	木村 与吉(道自然観察指導員連絡協議会)
116	2.15	遺跡調査からみた自然情報	西田 茂(北海道埋蔵文化センター)
117	3.15	都市におけるアカゲラの生活	小高 信彦(北大大学院地球環境研)
118	4.19	野鳥とパソコン時代	長谷川 稔(日本野鳥の会札幌支部)
119	5.17	ウトナイ湖サンクチュアリをめぐる昨今の諸問題	村井 雅之(日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ)
120	6.21	最近における日本の鳥事情 (10周年記念特別企画)	百武 充(日本鳥類保護連盟)
121	7.19	エゾライチョウの生息環境について	樋口 享軌(環境庁自然保護局西北北海道事務所)
122	8.16	東南アジアでの鳥類標識調査体験記	武本 行和(日本鳥類標識協会)
123	9.20	野鳥会報の編集テクニックあれこれ！	森田新一郎(北海道野鳥愛護会)
124	10.18	北海道のツチガエルは持ち込まれたものか？	齊藤 和範(北大大学院地球環境研)
125	11.15	森の花たちの生活	水島 未記(北海道開拓記念館)
126	12.20	焼尻島の鳥	有田 智彦(羽幌町役場)
127	1998. 1.17	海氷とペンギン	綿貫 豊(北大農学部)
128	2.21	タンチョウを調査・研究する	胡 東宇(北大大学院地球環境研)
129	3.28	キリマンジャロ登山とバードウォッチング	菊地 聖子(ノマド)
130	4.18	蘭学事始め -オランダに学ぶリサイクル-	岡崎 朱実(江別きれいな風の会)

131	5.16	海外における野鳥の楽しみ法	猪口 卓(札幌市役所)
132	6.20	トレッキング桃源郷 ブータン王国	伊藤 幸男(道自然観察指導員連絡協議会)
133	7.18	札幌市とその周辺における最近のツバメ事情	樋口 孝城(北海道野鳥愛護会)
134	8.15	オオタカの分布と生態調査記録	山田 良造(北海道野鳥愛護会)
135	9.19	今！札幌近郊の自然は -江別市を例として-	松山 潤(野幌森林公園を守る会)
136	10.17	アラスカ プリビロフ地方の自然を歩く	長谷 孝一(札幌市水道局)
137	11.21	アオサギの生息調査と環境保全	富川 徹(たくぎん総合研究所)
138	12.19	ハクチョウが元気になった！ -鉛中毒から復帰まで-	中出 哲也(酪農学園大学獣医学部)
139	1999. 1.16	シギ・チの鹉川河口保全(再生)に向けて	山下 茂(ネイチャー研究会 in むかわ)
140	2.13	豊平川の野鳥観察から	早川いくこ(豊平川ウォッチャーズ)
141	3.20	札幌市街地の生き物たち ~自然緑地の野ネズミと木の実~	渡辺 修(さっぽろ自然調査館)
142	4.17	北極圏 スピッツベルゲン島の自然	藤井 純一(NTT-TE 北海道/元南極越冬隊員)
143	5.15	マガンとひと 何で食害が起こるのか？	牛山 克己(東大大学院農学生命科学研究科)
144	6.19	オオタカの行動圏	工藤 琢磨(森林総合研究所北海道支所)
145	7.19	カモ類・タカ類 雑学	中村 茂(酪農学園大学獣医学部)
146	8.21	初心者バーダーある鳥学の試み	内山 正裕(日本野鳥の会札幌支部)
147	9.18	北海道近海のラッコ	服部 薫(北海道大学獣医学部)
148	10.16	北海道の川のしくみ -水鳥の生活環境を考える-	妹尾 優二(エコテック)
149	11.20	カラスのクルミ割り行動	足立 泰啓(NHK札幌放送局)
150	12.18	野幌森林公園の四季 (150回記念講演会)	村野 紀雄(酪農学園大学環境システム学部)
151	2000. 1.15	コスタリカのエコツアーリズム	武田 忠義(北海道生活環境部環境室)
152	2.19	石狩の鳥 -シギ・チドリの記録を中心に-	樋口 孝城(石狩鳥類研究会)
153	3.18	北海道のアオサギ Part II	松長 克利(北大大学院地球環境研究科)
154	4.15	野鳥の楽園 ランカウイ	猪口 卓(札幌市役所)
155	5.20	鳥の種名と正しい呼び方	佐藤 正秀(北海道自然保護協会)
156	6.17	渡島大島に野鳥を訪ねて	猿子 正彦(日本野鳥の会札幌支部)
157	7.15	北海道のサンショウウオ	

158	8.19	幼魚 イトウの生態	中林 成広(北海道両棲爬虫類研究所)
159	9.16	標識調査から得たウミネコの移動	江戸 謙顕(北大大学院地球環境研究科)
160	10.21	鳥の鉛中毒について考える	小杉 和樹(利尻島自然情報センター)
161	11.18	オオジュリンの渡りについて	山本 睦喜(酪農学園大学獣医学部)
162	12.16	ミレニアム・野鳥フリートーキング	広川 敦子(日本鳥類標識協会)
163	2001. 1.20	新世紀、自然との触れあい事始め	(野鳥お勉強会事務局)
164	2.17	寄生するハチの話	酒井 健司(野生生物総合研究所)
165	3.17	アライグマの現状と課題	小西 和彦(北海道農業試験場)
166	4.21	苫小牧宮の森における鳥の渡り	池田 透(北海道大学大学院文学研究科)
167	5.19	札幌の鳥 一渡りルートは？	佐田 正行(日本鳥類標識協会)
168	6.16	林間放牧と植物	竹中 万紀子(北海道東海大学)
169	7.21	私たちの探鳥会と30年の記録	持田 誠(北大農学部附属植物園)
170	8.18	北海道のザリガニ	井上 公雄(北海道野鳥愛護会)
171	9.22	カラスの食べ物を調べる	斉藤 和範(旭川大学)
172	10.20	オサムシとアライグマ	近藤 太佳彦(酪農学園大学環境システム学部)
173	11.17	室蘭の渡り鳥	堀 久繁(北海道開拓記念館)
174	12.15	ケンボッキ島(浜中町)におけるコシジロウミツバメの繁殖	伴野 俊夫(ヨシキリの会)
175	2002. 1.19	宮島沼のガンを調査して	河原 淳(野生生物総合研究所)
176	2.16	わたしの人と自然の架け橋術	谷野 文則(元北大大学院地球環境科学研究科)
177	3.16	ウトナイ湖とハクチョウ ーウトナイ湖におけるハクチョウの生息状況ー	濱本 真琴(北海道野幌森林公園事務所)
178	4.20	北海道の海鳥のはなし	葉山 政治(財 日本野鳥の会ウトナイ湖サクシユアリ)
179	5.11	礼文の鳥と自然	長 雄一(北海道環境科学研究センター)
180	6.16	廃棄物対策の現状と課題	宮本 誠一郎(レブンクル自然館)
181	7.13	江別の川と鳥	幌村 幸司(北海道日高支庁地域政策部)
182	8.15	鳥類による種子散布 ー駒ヶ岳の例からー	松山 潤(日本野鳥の会江別支部)
183	9.28	オオセグロカモメが札幌中心部で繁殖か。なぜ？	西 秀雄(北大大学院地球環境科学研究科)
			足立 英二(日本野鳥の会札幌支部)



- 184 10.19 海外バードウォッチングツアー  
佐々木 裕(アイデアル ワールド)
- 185 11.16 カラフトビンズイとビンズイ  
花田 行博(日本鳥類標識協会)
- 186 12.21 欧州に学ぶ湿地の保護 -マガンとの共存を目指して-  
富川 徹(野生生物総合研究所)
- 187 2003. 1.18 新年スライド会 野鳥の写真は気ままに撮ろう!  
佐藤 晶人(元北大野鳥研究会)
- 188 2.15 原生花園の植物復元  
長尾 康(北海道環境生活部環境自然環境課)
- 189 3.15 鳥島におけるアホウドリの現況報告  
辻 幸治(日本鳥類標識協会)
- 190 4.19 札幌周辺の標識調査から -羊ヶ丘の渡り鳥とシヨウドウツバメ調査-  
河原 孝行(森林総合研究所 北海道支所)
- 191 5.17 鉄の鳥と環境破壊 -ノムさんの今昔自然雑感-  
野村 芳美(野生生物総合研究所)
- 192 6.21 北海道の地下性チビゴミムシの話  
大山 克也(株式会社 エーティック)
- 193 7.21 北海道のアオサギ PartⅢ  
松長 克利(北海道アオサギ研究会)
- 194 8.21 鳥獣保護センター救護活動奮闘記  
盛田 徹(ウトナイ湖野生鳥獣保護センター)
- 195 9.27 マガンの食害原因と対策  
天野 達也(東大大学院農学生命科学研究科)
- 196 10.18 ワシ類の保護を考える  
白木 彩子(北海道環境科学研究センター)
- 197 11.14 江別の湖沼に飛来するカモ類の観察から  
吉野 智生(酪農学園大学獣医学部)
- 198 12.20 帯広におけるカラスの生態  
玉田 克巳(北海道環境科学研究センター)
- 199 2004.1.17 島鳥閑話 -シマフクロウの今とむかし-  
長谷川 充(日本野鳥の会苫小牧支部)
- 200 2.21 おめでたい 鳥のはなし 200 回記念特別講演  
正富 宏之(元専修大学北海道短期大学)
- 201 3.27 北大構内の野鳥今昔  
山田 雅仁(北大大学院地球環境科学研究科)
- 202 4.17 蜘蛛を調べて  
石田 裕一(元酪農学園大学環境システム学部)
- 203 5.15 アメリカの国立公園事情  
愛甲 哲也(北大大学院農学研究科)
- 204 6.19 サハリンのオオワシ&オーストラリアのヒクイドリの話  
足立 泰啓・鈴木 隆夫(NHK札幌放送局)
- 205 7.24 エゾナキウサギを天然記念物に!  
矢部 玲子(札幌学院大学)
- 206 8.21 絶滅寸前のタンチョウはどこで何を食べていたか?  
斉藤 和範(道立旭川高等看護学校)
- 207 9.25 長都沼の雁カモ類と環境保護  
佐藤 ひろみ(長都沼の雁カモを守る会)
- 208 10.16 クマゲラと私 -札幌のクマゲラを守る-  
笹森 繁明(北海道野鳥愛護会)
- 209 11.20 何でだろう?札幌中心部、豊平川にオオセグロカモメ  
戸津 高保(北海道野鳥愛護会)

- 210 12.18 野生ウズラの現状について  
奥山 正樹 (環境省西北北海道地区自然保護事務所)
- 211 2005.1.22 北海道野鳥図鑑の編集のことなど  
島田 明英 (自然ウォッチングセンター)
- 212 2.19 北広島市の鳥類相とその魅力！  
先崎 啓究 (北海道野鳥愛護会)
- 213 3.26 バードカービングとわたし  
北尾 久美子 (バードカービング作家)
- 214 4.16 コウモリを探そう！  
中島 宏章 (野生生物総合研究所)
- 215 5.21 海外探鳥をスライドショーで考える -アジアを中心に-  
猪口 卓 (札幌市役所)
- 216 6.19 どうぶつ病院奮闘記！ -野生動物の看護と治療-  
齋藤 聡 (石山通り動物病院)
- 217 7.09 北海道 アオサギの世界 -アオサギ調査報告(総集編)  
松長 克利 (北海道アオサギ研究会)
- 218 8.20 札幌近辺の？ハゼ～あれこれ……！  
橋本 誠也 (GIS北海道)
- 219 9.10 礼文島・探鳥の魅力！  
嶋崎 太郎 (東京農業大学)
- 220 10.29 イトウは本当に絶滅危惧種か……？  
秋葉 健司 (野生生物総合研究所)
- 221 11.19 博物館標本と折居彪二郎  
加藤 克 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園)
- 222 12.17 空飛ぶ生き物 -釧路周辺の鳥とカクイドリ!? (コウモリ)-  
芹澤 裕二 (野生動物研究家)
- 223 2006.1.21 昨今のウトナイ湖周辺活動とタンチョウについて  
原田 修 (ウトナイ湖サンクチュアリ)
- 224 2.18 北海道におけるミサゴの営巣環境  
佐々木 晶子 (北海道ネイチャーリサーチ)
- 225 3.18 ニュージーランド鳥見旅！  
早坂 泰夫 (北海道野鳥愛護会)
- 226 4.15 野遊びとわたし  
佐藤 祐一 (北海道自然観察協議会)
- 227 5.20 みんなで考えよう シマアオジの保全対策  
玉田 克巳 (北海道環境科学研究センター)
- 228 6.17 エゾライチョウの話 20周年特別記念講演  
藤巻 裕蔵 (帯広畜産大学名誉教授)
- 229 7.22 埋文センターのトリとケモノ  
西田 茂 (北海道埋蔵文化センター)
- 230 8.19 野幌森林公園の戦後開拓  
西田 秀子 (新札幌市史編集委員)
- 231 9.30 モエレ沼(札幌市)の水鳥  
吉田 言 (酪農学園大学環境システム学部)
- 232 10.21 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ  
門村 徳男 (ネイチャー研究会 in むかわ)
- 233 11.18 アライグマによる被害を防止するために  
阿部 豪 (北大大学院 文学研究科)
- 234 12.16 チュウヒの生態写真に迫る！  
新城 久 (北海道野鳥愛護会)
- 235 2007.1.20 札幌周辺のカラスたち  
竹中 万紀子 (北海道東海大学)

- 236 2.17 2007 むし講座 -日本産オオヨモギハムシ種群の地理的変異と進化-  
齋藤 諭 (日本データサービス)
- 237 3.17 自然攪乱と野鳥の仲一敵、味方？-  
黒沢 令子 (北大大学院 地球環境科学研究科)
- 238 4.21 どうなる？北海道とサハリンの自然  
奥谷 浩一 (札幌学院大学 人文学部)
- 239 5.19 絶滅危惧種シマアオジ さてどのように保護するか？  
玉田 克己 (北海道環境科学研究センター自然環境部)
- 240 6.16 シマフクロウの生活 Part II  
早矢仕 有子 (札幌大学法学部)
- 241 7.21 タスマニアの大自然はこれだ！  
菊池 聖子 (自然フィールドたび倶楽部)
- 242 8.18 自然界における虫の役割  
久万田 敏夫 (元北大農学部)
- 243 9.21・22 野鳥お勉強会 in 旭川 外来種ワークショップ  
① 個体から地球の健康状態をのぞき診る保全医学研究～野鳥救護、アライグマ防除、タヌキ冬眠試験を例として  
福井 大祐 (旭川市旭山動物園)  
② ウチダザリガニは在来生物をいかに駆逐するのか？  
齋藤 和範 (道立旭川高等看護学校)  
③ 江丹別のウチダザリガニ防除体験 & 試食会
- 244 10.20 野鳥基礎講座 カラスってどんな鳥？  
中村 眞樹子 (札幌カラス研究会)
- 245 11.17 エゾシカとの交通事故～何が問題で、どうしたらいいの？  
野呂 美紗子 (財団法人 北海道開発技術センター)
- 246 12.15 支笏湖、大自然とその魅力に迫る！  
許 成基 (支笏湖の水とチップの会)
- 247 2008.1.19 航路の海鳥ウォッチングは楽しい！ -苫小牧～八戸航路の海鳥たち-  
北山 政人 (北海道野鳥愛護会)
- 248 2.16 熱き“鳥”を語る講師たち  
安 真一郎 (北海道野鳥愛護会)
- 249 3.15 ウルルン中国鳥紀行  
織田 ゴム長 (日本野鳥の会 札幌支部)
- 250 4.19 支笏湖の鳥  
富川 徹 (野生生物総合研究所)
- 251 5.17 生物にやさしい自然魚道の可能性を探る  
張 裕平 (野生生物総合研究所)
- 252 6.21 昨今における環境をめぐる鳥の話題  
小畑 淳毅 (北海道空知支庁)
- 253 7.17 虫と人との関係 -吸血昆虫を中心に-  
佐々木 均 (酪農学園大学環境昆虫学教室)
- 254 8.16 勇払弁天沼におけるチュウヒの生息環境  
笹森 健太 (北海道工業大学大学院)
- 255 9.20 アオサギの未来を考えてみませんか？  
松長 克利 (北海道アオサギ研究会)
- 256 10.3 越冬地と中継地におけるマガンの遺伝構造  
森口 紗千子 (東京大学農学生命科学研究科)
- 257 11.22 札幌と旭川におけるチゴハヤブサの営巣記録  
菰田 雅樹 (環境共育事務所 うてきあに)
- 258 12.20 北海道のチュウヒについて考える  
一北 民郎 (北電総合設計)
- 259 2009.1.17 礼文島 サシバの記録と野鳥たち  
富川 徹 (野生生物総合研究所)・小畑 淳毅 (北海道空知支庁)

- 260 2.21 森と水鳥の不思議な関係:アオサギの繁殖コロニーを例として  
上野 裕介 (北海道大学大学院 水産科学研究科)
- 261 3.28 サハリン先住民族の植物利用について  
水島 未記 (北海道開拓記念館)
- 262 4.18 北海道 足元にいるトガリネズミたち  
南波 興之 (北海道大学低温科学研究所 生物多様性グループ)
- 263 5.16 石狩の鳥・北海道の鳥  
樋口 孝城 (石狩鳥類研究会)
- 264 6.20 スズメのはなし:生態と個体群の遺伝的構造  
泉 洋江 (北海道大学大学院地球環境科学研究科)
- 265 7.18 野幌森林公園の鳥類とカワニナの間をしらべろ!  
前場 健太 (酪農学園大学)
- 266 8.15 札幌周辺でのツツドリと宿主となる鳥とのビミョウな関係  
川路 則友 (森林総合研究所北海道支所)
- 267 9.26 札幌近郊におけるコウモリの生活 -防風林・農耕地の有用性-  
石井 健太 (野生生物総合研究所)
- 268 10.17 野鳥の民話を聞く2 ウトウという名の鳥ほか  
武沢 和義 (北海道野鳥愛護会)
- 269 11.21 シマアオジとの半世紀  
小山 心平 (ナチュラリスト)
- 270 12.19 積丹半島におけるイワツバメの構造物利用  
富川 徹 (野生生物総合研究所)
- 271 2010.1.16 鳥の健康を診る! -鳥の寄生虫を調べる-  
吉野 智生 (酪農学園大学獣医学部)
- 272 2.20 鳥とサクラ  
猿子 正彦 (日本野鳥の会 札幌支部)
- 273 3.20 カナダアルバータ州の鳥たちを観察して  
竹内 強 (北海学園札幌高校)
- 274 4.17 地域の活性化を考える -技術士会の活動を通じて-  
伊藤 恒雄 (内外エンジニアリング北海道)
- 275 5.15 クマガラを守ろう! -人と天敵動物について考える-  
笹森 繁明 (北海道野鳥愛護会)
- 276 6.19 将来の環境が不確実な下での生物の成長と繁殖戦略!  
大泉 嶺 (北海道大学環境科学院)
- 277 7.17 滑空性哺乳類の生態を知る -エゾモモンガの研究から-  
浅利 裕伸 (北海道野生動物研究グループ)
- 278 8.21 狩猟鳥について考える!  
川路 則友 (森林総合研究所北海道支所)
- 279 9.18 やんばるの森のオオコノハズクとリュウキュウコノハズク  
外山 雅大 (北海道大学環境科学院)
- 280 10.16 オオセグロカモメは都会がお気に入り?  
長谷川 理 (エコ・ネットワーク)
- 281 11.20 野鳥お勉強会 in 帯広  
① 帯広-広尾道を中心にモモンガやコウモリ等の保全対策  
柳川 久 (帯広畜産大学)  
② 十勝平野の猛禽類(オオタカ、ハイタカ、ノスリ)の分布状況と営巣環境  
平井克亥 (帯広畜産大学)
- 282 12.18 鳥類調査でわかること/わからないこと -もっと注目したい“多様で動的で連続”な自然  
のあるべき姿  
土屋 尚 (日本野鳥の会 札幌支部)
- 283 2011.1.15 コウモリと鳥と写真と私・・・、  
中島 宏章 (写真家)
- 284 2.19 人工林の管理と鳥類多様性  
山浦 悠一 (北海道大学大学院農学研究院)

- 285 3.19 カイツブリ -身近な水鳥の生活を探る- 中田 達哉 (酪農学園大学環境システム学部)
- 286 4.16 短歌でバードウォッチング 臼田 正 (日本野鳥の会札幌支部)
- 287 5.21 石狩沿岸地域の鳥たち 25周年記念企画 樋口 孝城 (石狩鳥類研究会)
- 288 6.18 ヤブサメの生態は藪の中、間の中 上沖 正欣 (立教大学大学院生命理学専攻)
- 289 7.16 石狩地方の田んぼに生息するアオサギの生態 玉田 克巳 (北海道立総合研究機構)
- 290 8.20 夏鳥が来る日を予測できる! -札幌市羊ヶ丘での20年間の記録から- 川路 則友 (森林総合研究所北海道支所)
- 291 9.17 私の見た身近なチョウやガなどなど 原 瑞恵 (日本蛾類学会)
- 292 10.15 ヒグマの多発年の予測と対策+ 幌村 幸司 (北海道環境生活部環境局自然保護課)
- 293 11.19 ヒグマの出没状況Ⅱ+20年の野生鳥獣被害から見えるもの 幌村 幸司 (北海道環境生活部環境局自然保護課)
- 294 12.17 札幌羊ヶ丘の鳥類標識調査(続) 河原 孝行 (森林総合研究所北海道支所)
- 295 2012.1.21 フィールドで出会う爬虫類や両生類 徳田 龍弘 (爬虫類・両生類写真家・研究者)
- 296 2.18 最近のエゾシカ事情について 伊吾田 宏正 (酪農学園大学農食環境学群環境共生学類)
- 297 3.17 オオタカにストレスを与えない調査方法を考える ~オオタカの鳴き声と繁殖確認への応用 松岡 和樹 (北海道野生動物研究グループ)
- 298 4.21 日本野鳥の会の誕生 -中西悟堂とその時代- 松山 潤 (日本野鳥の会江別支部)
- 299 5.26 仮)石狩川のシギ・チドリとチュウヒについて 道川 富美子 (北海道野鳥愛護会)
- 300 6.16 **野鳥お勉強会 第300回記念講演会&パネルディスカッション**  
 [第1部] 記念講演「鳥と渡りと生物多様性の保全」 樋口 広芳 (慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)  
 [第2部] パネルディスカッション「鳥と生物多様性+(プラス)」  
 <パネリスト> 川路 則友 (独立行政法人 森林総合研究所北海道支所長)  
 小野 宏治 (環境省釧路自然環境事務所野生生物課課長補佐)  
 武田 忠義 (北海道環境生活部環境局自然保護課主査)  
 大橋 弘一 (野鳥写真家・自然雑誌 faura 編集長)  
 樋口 広芳 (慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)  
 <コーディネーター> 富川 徹 (株式会社 野生生物総合研究所主任研究員・野鳥お勉強会代表)  
 [第3部] 第300回記念祝賀会(交流会)
- 301 **予定** 7.21 マレーシアの探鳥と自然観察 佐々木 裕 (HBCトラベルサービス)



野鳥お勉強回300回のあゆみ ～おもなスナップ写真から～



1992年6月 第60回 函館開催



1995年10月 第100回



1997年6月 第120回 10周年



2002年5月 第179回



2003年9月 第195回



2003年12月 第198回



2004年1月 第199回



2004年2月 第200回



2004年9月 第207回



2010年1月 第271回



2010年2月 第272回



2010年7月 第277回



2010年8月 第278回



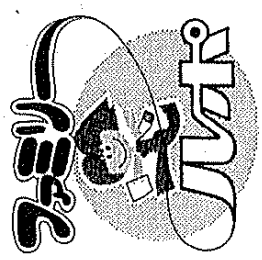
2010年11月 第281回 帯広開催



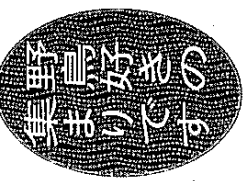
2011年2月 第284回

# 居酒屋さんで勉強会

リポーター 沢田 みか



「ファミパ」の「パ」は「パブリック」の「パ」から来ています。これは「公共」や「社会」を意味する言葉です。また、「ファミ」は「ファミリー」の「ファミ」から来ています。これは「家族」や「家庭」を意味する言葉です。このように、「ファミパ」は「公共」や「社会」の発展のために「家族」や「家庭」の力を活用することを目的としています。



この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。

この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。



来しし秋に合わせた、なほ、時間がたつのを覚えることも...

## とんとん鳥を語る 趣味で広げる友達の輪

とんとん鳥を語る。趣味で広げる友達の輪。この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。

自然と触れ合う心を広げよう。この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。



この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。

この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。

**私の仕事**

株式会社 札幌マキーン紹介所

〒060-0801 札幌市中央区南一条西五丁目1番1号

TEL: 011-221-5421

「私の仕事」は、札幌マキーン紹介所の仕事です。この仕事は、札幌マキーン紹介所の仕事です。この仕事は、札幌マキーン紹介所の仕事です。

この秋、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。この観察会は、十勝の自然を満喫するために、野鳥愛好会が主催する「野鳥観察会」が開催されます。



★らいけ!  
エコロジー

## 野鳥お勉強会

居酒屋で、飲んで  
食べて、お勉強

「野鳥お勉強会」は毎年5月にスタート。たつきん総合研究所・環境調査室に勤務する富川さんと、野鳥に関した団体5つに所属している柳沢さんが中心になって企画・運営している会だ。

「野鳥の全主催」の探鳥会を顔見知りになった野鳥好きに声をかけて、月にいち度開かれる勉強会は、居酒屋で飲んで食べてという和気あいあいとした雰囲気。室内での勉強会を始めるようになったのは、外で観察した鳥や自然に対して抱いていた不思議や疑問を、いくらかでも解消できればとの思いから。回ごとに、関係団体の人や学校教師、各方面の職業に携わっている人に、ボランティアで講師に来てもらっている。だから、特に鳥に固



ヤマセシ  
●双眼鏡を使った鳥探しは初心者にとっては少々大変。でも鳴き声でどの鳥かわかるようになれば楽しいもの。探鳥会に参加するようになって、視力がよくなった人がいるなど、自然の中に身を置くことは、心身を健全してくれるようだ。



●勉強会のように。熱心にメモをとっている人。酒が入って開放にしゃべり出す人。年齢も職業もさまざまだけど、大好きな自然の話に花が咲く。

執することなく、広く自然環境に関することを受けるそうだ。もともと堅苦しい(?)講義は30分ほど、あとの1時間半は質問やさくばらんやおしゃべりで過ごすのが通例になっている。こんな感じなので、鳥に興味を抱き始めたばかりの人へも参加しやすいのでは? 最近は大きな会場で開催される、自然に関するシンポジウム、イベントが多くなってきたけれど、情報が一方通行になりがち。この会はいままでオープンなコミュニケーションの場として、このスタイルを守っていくことで、参加者のよりどころ的存在になっていくのかも。

●野鳥お勉強会  
612・8531 (会費)

YELLOW PAGE 1993.1

VOL. 220

HOKKAIDO INTERNATIONAL WOMEN'S ASSOCIATION

MAY 1993

# What's on in Sapporo?

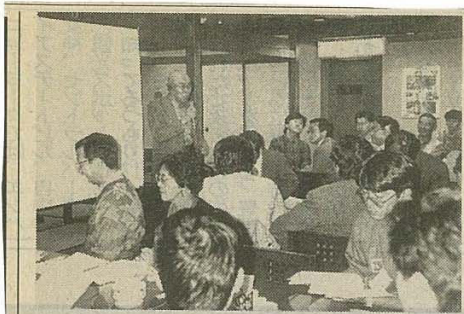
## Birds and Beer

Bird lovers hold a meeting at a tavern every 2nd Saturday. A casual discussion on wild birds and nature is held over a glass of beer after listening to a lecture given by a volunteer. The next meeting will be held on May 8, 6 p.m. at "Yumeji", B1 Showa Bldg., Odori Nishi 5-chome, 252-0668. Anyone interested in nature and wild birds is welcome. For details, call Mr. Tomikawa at 011-387-7007.

"What's on in Sapporo" (北海道国際婦人協会)

の案内 1993.4





こだま (報)

▽：飲んで食べて野鳥や自然について語り合う札幌の市民グループ「野鳥お勉強会」(柳沢信雄・代表世話人)が二十一日、百回目の記念講演会「写真」を迎えた。

▽：同会は柳沢代表と飲み仲間三人で八年前に結成。月一回のペースでサラリーマンや主婦らが市内の居酒屋に集まり、講師の謝礼もお酒とつまみをこそうするだけ、という手づくりの会合を続けている。

▽：百回目は五十人以上が参加。野鳥のスタイルを染しみグラスを傾けながら、参加者は「会に出ても千鳥足にならないよう自戒しています」。

(第3種郵便物認可)

居酒屋を会場に、ジョッキを傾けながら月一回の「野鳥お勉強会」が、九年以上も続いている。講師は道内のナチュラリス。会員は平日、店に集まってくる人。会費は飲食代の割り勘分三千円くらい。飲んでさえならずとも食指をそそられる企画で、事実、OLや主婦の常連も多い。

このユニークな勉強会は、一九八七年の春に始まった。言い出しっぱは、トリ仲間の全国愛鳥教育研究会北海道支部長の柳沢信雄さん(み)、たぐん総研の富川徹さん(み)、当時の居酒屋マスターで今は故人となった吉田秀治さんの三人。名刺に「雀小屋番人」とある柳沢さんは「鳥を追っかけてばかりいないで、飲み食いしながら鳥についてしゃべったり聞いたりするのも

食べ、飲み、語らう

いいなあーとなったんですよ」といふ。勉強会のおぜん立ては、富川さんの担当。環境調査の仕事で培われた人的ネットワークをフルに活用して、毎月の講師を引っ張ってきた。

この九月まで百二十回のリストを見ると、テーマは道内の野鳥の生態や自然保護からスバル、シベリア、南極大陸まで広がっている。昨年の百回記念は、キタキツネで知られる竹田津美さんの「アフリカの野鳥を訪ねて」で、五十人もの人が集

はっぴーグループ

▶116 野鳥お勉強会 札幌市



100回記念の竹田津美講師

「鳥に限らずいろいろな分野の人に来てもらって、一方通行でなく自由に語り合う情報交換の場を心掛けています」と富川世話人。勉強会は第三王曜日午後六時、札幌市中央区大通西五、昭和ビル地下「ゆめじ」十九日のテーマは「もし、ヒクマに出合ったら?」。おいしく食べて飲んで面白い話が聞けること請け合いだ。(お)

▽連絡先 江別市文京台南町47、富川宅 011-8366-7007



# 自然語るなら居酒屋で

## 「野鳥お勉強会」100回超えた

### 飲んべえ会かと思つたけど

### 講師多彩に輪広がる

お酒を飲みながら野鳥や自然のお話を——札幌市の居酒屋で八年前に始まった「野鳥お勉強会」が百回を超えた。お酒を飲み、やきとりを食べながら自然について勉強しようというこの会。百回記念の勉強会には五十人以上が集まった。酒と自然を介した人の輪は確実に広がっている。

居酒屋は札幌市中央区大通西五丁目「夢二亭」(現在のゆめじ)。当時の店主吉田秀治さん(金と、自然教育や野幌森林公園でクマゲラ調査などに取り組んでいる、当時札幌市立三里塚小学校長だった柳沢信雄さん(六セ)、たつきん総合研究所で環境調査の仕事をしてる富川徹さん(百から常連客が意気投合、八七年五月、言い出しっぱの柳沢さん)を講師に十数人が集まって二回目の勉強会が開かれ

た。テーマは「身近な野鳥 月一回のペースで開催。五十回まで夢二亭で開き、その後、吉田さんが店を移ったため、場所が変わったが、九二年の六十二回目からは夢二亭のあと「ゆめじ」(富川英治)で、毎回十人から二十人が参加して続けている。

百回目は記念として二十一日、会場を広い居酒屋にして、五十数人が集まった。大ジョッキをかたむけながら、網走支庁小清水町

### 札幌

のナチュラリスト竹田津実さんのスライドつきの話を

聞き、語りあった。勉強会の講師は、野鳥の会や野鳥愛護会、各地の自然観察会の指導的立場の人までさまざま。札幌だけでなく道内各地から手弁当で講師を務めている。

竹田津実さんの「アフリカの野鳥」の話を聞く参加者たち。21日、札幌市中央区「安具菜」道庁前店で



の勉強会として継続したことに感激。「いつも新鮮な情報をありがたう」など心あたまるものばかりだ。柳沢さんは「百回なんて夢のよう。この会で多くの人と知り合いになった。これからは若い人たちががんばってもらいたい」。富川さんも「勉強もさることながら、人の輪が広がってゆくのうれしい。百一回以降、気持ちを新たに、これまでもと毎月第三土曜日開催を原則に、続けてゆきたい」と話している。

百一回目は十一月十八日午後六時から、札幌市中央区大通西五丁目昭和ビル地下街「ゆめじ」(〇一一二五一〇六六八)で。講師は札幌円山動物園飼育課の白澤昌彦さん。テーマは「円山動物園の鳥たち」。問い合わせは勉強会事務局の富川徹さん(自宅〇一一三八七〇七〇七、勤務先〇一一六二二八五三)へ。



シヨツキ片手に、野鳥、自然を、語り合う。札幌市の居酒屋で月一回開かれる「野鳥お勉強会」。また昭和だった87年5月に始まって18年、今年十月に211回を数えた。お酒とおしゃべりを介した自然を愛する人の輪は大きく広がっている。

# 「自然をかなに一杯」18年

札幌・大通公園に近いこの地下の飲食街。居酒屋「ゆめじ」のれんをくぐる。こがりに20人ほどがおしゃべり、焼酎、酒肴の音が並んだ草を覗き、生ビールを飲んでいる。

「それで、そろそろはじめましょうか」

1月22日の土曜日。午後6時、世話人代表の富川徹さん(右)の司会で「野鳥お勉強会」がスタート。この日の話題提供者講師は自然ウオッチャーズ代表の鳥田明葉さん(左)。テーマは鳥田さんが編集に携わった「北海道野鳥図鑑(二重刊)」の編集秘話だ。「実は初版本で写真説明を六つ間違っちゃったんです。321種に及ぶ野鳥の写真集の苦勞話や失敗

談をエピソードを交えて約1時間。最近の野鳥情報を披露して話を締めくくった。集まった人は、なまにたまをりながら、おしゃべり、生ビールや焼酎を飲み続け、講師の話が終わるとほろ酔いも手伝い、「印税はどうしたの?」など、次々と質問がくる。

## 野鳥お勉強会

参加者は大学の先生、旅行会社の営業マン、専業主婦、自然観察会員の女性たち。ついでに次世代から70代までさまざま。初顔合わせの人もあるが、野鳥や自然が大好きなのは共通。話はずみ広がり、会のお開きになったのは午後10時近かった。

この会は87年、札幌市立三里小学校の校長だった愛鳥教育研究会の柳沢昌雄さん(故人)、たけさん総合研究所で環境調査の仕事をしてきた富川さんらから「お酒を飲みながら勉強会をやろう」と始まった。「自然をしゃべり、飲食の好きは多く」と言いたずわり、この作り、一参加

目。参加者は飲食のイベント、大学の研究者、環境省や道庁の専門家など。最近のテーマも「原花園の植物復元」「帯広における国立公園事情」「エゾマユササギ天竺記動物園」など。札幌の中心

## 会話はずみ広がる人の輪



部にもオヤクロカエ。これまで、講師は5人以上、参加者は延べ100人を超えた。

北海道拓殖銀行の後、たけさん総研時代、ここからスタート。「野生物種総合研究」に興味を持ち、環境調査を続け、川さん。「お酒がおいしいので、ついでに本音は話すと、美しさがの会を通じて、それならなかな人がな、人の輪が広がってほしい。私も可能な限り続けたいです。」

次回の2月19日、10回目の勉強会は北の道と道庁との協力で、講師は野鳥愛護会の若菜だ。(報道部・深)

この日の講師の鳥田さん(右から2人目)話を聞く参加者たち。1月22日、札幌市中央区大通西5丁目、居酒屋「ゆめじ」で

【野鳥お勉強会】  
▽代表世話人・富川徹さんの連絡先  
自宅 (011・387・7007)  
会社 (011・700・6737)  
▽会場の居酒屋「ゆめじ」  
札幌市中央区大通西5丁目、昭和ビル地下街  
(011・251・0668)  
▽参加費 飲食費、資料代込みで9000円

わたしの  
**札幌プロジェクト**



野鳥お勉強会

<http://www.toriben.org/>





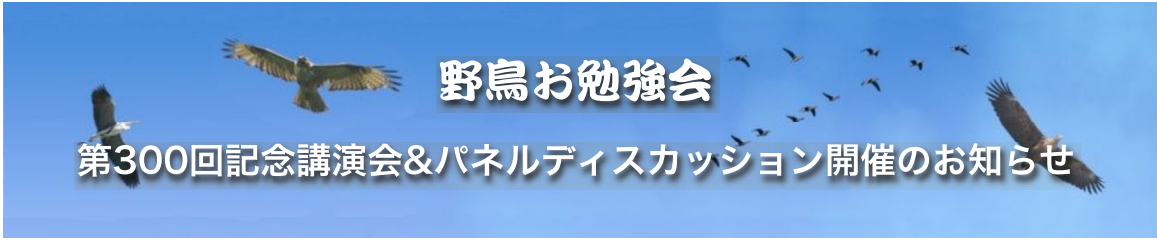
開催資料 しおり



希少野生動植物種保護増殖事業パンフレット&北海道でみられるウミスズメ類のパンフレット(環境省)



北海道生物多様性保全計画の概要パンフレット(北海道)



# 野鳥お勉強会

## 第300回記念講演会&パネルディスカッション開催のお知らせ

### 1 目的及び内容

野鳥お勉強会第300回の開催を記念して、昨今北海道で注目されている生物多様性の保全に鑑み、それに関わる記念講演及びパネルディスカッションを行います。これらにより、北海道における鳥類及び自然の保護への普及啓発を目指したいと思えます。

第1部では鳥類と生物多様性の保全がご専門の、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授（元東京大学大学院農学生命科学研究科教授）の樋口広芳先生より記念のご講演をいただきます。第2部では、北海道の鳥類保護分野に携わる第一線の方々をパネリストにお招きして、「鳥と生物多様性+(プラス)」をテーマに、現状からどう捉え、どう考え、どう行動したらよいか、そして私たちにできることは何かなど、気取らずに自由にディスカッションを行いたいと思えます。また、第3部としては恒例の第300回記念をお祝いしての祝賀会（交流会）を執り行います。

多数のご参加をお待ちしております。

### 2 開催日時

平成24年6月16日（土） 14:00～19:50（受付13:20より）

### 3 開催場所

札幌サンプラザ

札幌市北区北24条西5丁目 011-758-3111

### 4 プログラム（敬称略）

開会 14:00 司会 松山 潤（日本野鳥の会江別支部長）

**【第1部】 記念講演 14:10～15:30**

演題：「鳥の渡りと生物多様性の保全」

樋口 広芳（慶応義塾大学大学院政策・  
メディア研究科特任教授）

休憩 15:30～15:45

**【第2部】 パネルディスカッション 15:45～17:20**

テーマ：「鳥と生物多様性+(プラス)」

<パネリスト>

川路 則友（独立行政法人 森林総合研究所北海道支所長）

小野 宏治（環境省釧路自然環境事務所野生生物課長補佐）

武田 忠義（北海道環境生活部環境局自然保護課主査）

大橋 弘一（野鳥写真家・自然雑誌faura 編集長）

樋口 広芳（慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授）

<コーディネーター>

富川 徹（株式会社 野生生物総合研究所主任研究員・野鳥お勉強会代表）

**【第3部】 第300回記念祝賀会（交流会） 17:45～19:45 ※同ホテル内で行います。**

閉会 19:50

[裏につづく]

## 5 参加費及び申し込み先 事前申し込みが必要です！

参加ご希望の方は、以下の申し込み希望プログラムのうち、A、Bいずれかをお選びのうえ、氏名、住所、連絡先を明記し、メール、FAXいずれかの方法でお申し込みください。参加費は当日会場で受付にて申し受けます。（※個人情報に関しては、十分な配慮を行うとともに適正な管理に努めます）

### 【申し込み希望と参加費】

A：第1部、第2部、第3部のすべてに参加 ⇒ 4,500円（祝賀会費、資料代として）

B：第1部、第2部に参加 ⇒ 500円（資料代として）

### 【申し込み先】

- ① メール：野鳥お勉強会 富川 徹 tomikawa@toriben.org  
ホームページ（<http://www.toriben.org/>）からも申し込みます。
- ② F A X：松山 潤 011-387-1317（9:00～20:00にお願いします）

【締め切り】 6月8日（金）まで



主催 野鳥お勉強会  
協賛 (財) 北海道新聞野生生物基金  
協力 北海道野鳥愛護会、石狩鳥類研究会



新聞記事(関係分)

○平成 24 年 6 月 2 日 北海道新聞

120602 北海道新聞



**ジョッキ片手に肩肘張らず**

お勉強会は、道野鳥愛護副会長だった柳沢信雄さんが探鳥会後に楽しく情報交換する場を持つようになった。講演会や学習会では、簡単な質問をするのも気が引けるため、居酒屋で焼き鳥を食べ、お酒を飲みながら聞くことにした。堅苦しくならないよう「お勉強会」と名付けた。

毎月第3土曜午後6時から、札幌市中央区大通西5の「鳥次郎」で開いている。3500円の会費を払えば、だれでも参加できるのが特徴で、参加者数は毎回十数人、これまでに延べ4千人に上る。

講師は藤巻裕威帯広畜産大名誉教授や写真家竹田津美さんら専門家に加え、一般のハードウオッチャーや主婦も。内容もエゾライチョウやシマフクロウの生態から、庭に来る野鳥の観察記録など多岐にわたる。お勉強会の富川徹代表は「お酒の力を借りてはいいが、講師が熱く語る姿勢と自由に交流する場は他の会にはないもの」と胸を張る。

16日は午後2時から、札幌市北区北24西5、札幌サンフラザで、樋口広芳慶応大大学院特任教授の記念講演「鳥の渡りと生物多様性の保全」とハネルデイスカッション、交流会がある。参加費は記念講演、ハネルデイスカッションが500円、交流会にも参加すると4500円。

参加希望者は、8日までに野鳥お勉強会のホームページから申し込むか、メンバーの松山潤さんのファクス011・3387・1317（午前9時〜午後8時）へ。

3000回を迎える「野鳥お勉強会」。ビールを飲みながら、ざっくばらんなスタイルで野鳥について学んできた14月2日

## 居酒屋で野鳥講義 300回

月1回、土曜の夜に札幌市内の居酒屋で鳥や自然について学んでいる、野鳥お勉強会が16日、300回を迎える。1987年のスタートから25年。毎回、鳥に詳しい講師を囲んで、ビールジョッキを片手に野鳥の話に耳を傾けてきた。300回の節目は記念講演会として、居酒屋ではなく、札幌サンフラザで開く。

講師は藤巻裕威帯広畜産大名誉教授や写真家竹田津美さんら専門家に加え、一般のハードウオッチャーや主婦も。内容もエゾライチョウやシマフクロウの生態から、庭に来る野鳥の観察記録など多岐にわたる。お勉強会の富川徹代表は「お酒の力を借りてはいいが、講師が熱く語る姿勢と自由に交流する場は他の会にはないもの」と胸を張る。

16日は午後2時から、札幌市北区北24西5、札幌サンフラザで、樋口広芳慶応大大学院特任教授の記念講演「鳥の渡りと生物多様性の保全」とハネルデイスカッション、交流会がある。参加費は記念講演、ハネルデイスカッションが500円、交流会にも参加すると4500円。

参加希望者は、8日までに野鳥お勉強会のホームページから申し込むか、メンバーの松山潤さんのファクス011・3387・1317（午前9時〜午後8時）へ。

○平成 24 年 6 月 8 日 朝日新聞

120608 朝日新聞



**札幌の酒場で「勉強会」25年、16日記念講演**

鳥好き、おしゃべり好き、飲み食い好きが集まり、肩ひじはらずに野鳥や自然を語り合う「野鳥お勉強会」が札幌市の居酒屋で始まって25年。月1回の勉強会は300回を数え、記念の「講演会&パネルディスカッション」が16日、鳥類学者を招いて札幌市の札幌サンフラザで開かれる。

野鳥お勉強会は、1987年6月、札幌・大通公園に近いビル地下の居酒屋で始まった。「お酒を飲みながら勉強会をやろう」と野鳥好きの面々が意気投合。20人も座ればいっぱいになる居酒屋のこもりを会場に、一家言ある野鳥好きや在野の若手研究者や専門家らを講師に、和気あいあいの勉強会が今に続く。

発足当初から会のごりまめ役を担う環境調査会社野生物総合研究所主任研究員の富川徹さん68は「一本音の語り合いができていながらいける楽しさが長寿のひけつと言った。300回目は居酒屋ではなく、16日午後2時から札幌サンフラザ（北24西5）で開く。鳥類学者の樋口広芳・慶応大大学院特任教授が「鳥の渡りと生物多様性の保全」と題して講演。引き続き、樋口教授や野鳥写真家の大橋弘一さん、環境省、道の現場担当者らが討論、夜は交流会が開かれる。申し込みは8日までに、野鳥お勉強会のホームページ（<http://www.toribon.org/>）へ。」

25年も続く札幌の居酒屋での「野鳥お勉強会」

## 野鳥談義で乾杯

鳥好き、おしゃべり好き、飲み食い好きが集まり、肩ひじはらずに野鳥や自然を語り合う「野鳥お勉強会」が札幌市の居酒屋で始まって25年。月1回の勉強会は300回を数え、記念の「講演会&パネルディスカッション」が16日、鳥類学者を招いて札幌市の札幌サンフラザで開かれる。

野鳥お勉強会は、1987年6月、札幌・大通公園に近いビル地下の居酒屋で始まった。「お酒を飲みながら勉強会をやろう」と野鳥好きの面々が意気投合。20人も座ればいっぱいになる居酒屋のこもりを会場に、一家言ある野鳥好きや在野の若手研究者や専門家らを講師に、和気あいあいの勉強会が今に続く。

発足当初から会のごりまめ役を担う環境調査会社野生物総合研究所主任研究員の富川徹さん68は「一本音の語り合いができていながらいける楽しさが長寿のひけつと言った。300回目は居酒屋ではなく、16日午後2時から札幌サンフラザ（北24西5）で開く。鳥類学者の樋口広芳・慶応大大学院特任教授が「鳥の渡りと生物多様性の保全」と題して講演。引き続き、樋口教授や野鳥写真家の大橋弘一さん、環境省、道の現場担当者らが討論、夜は交流会が開かれる。申し込みは8日までに、野鳥お勉強会のホームページ（<http://www.toribon.org/>）へ。」



# 「野鳥お勉強会」 300回記念シンポ

札幌

毎月、講師を招いて札幌市内の居酒屋で鳥や自然の学習をしてきた「野鳥お勉強会」（富川徹代表）が1987年の開始以来、300回を重ね、記念講演会とシンポジウムが16日、同市北区で開かれ130人が参加した。写真。

記念講演会に先だって富川代表が「好きな鳥に関して遠慮なく語り合える場をつくりたいと始めた。300回を迎え信じられない思い」とあいさつした。続いて樋口広芳慶応大大学院特任教授が「鳥の渡りと生物多様

性の保全」と題して講演。「渡り鳥の保全には地域の視点だけでなく地球規模の視点が必要だ」と述べた。

また樋口特任教授ら



を交えたシンポジウムでは「生物多様性の保全にはデータの集積、解析が重要」「探鳥会などのデータも生かせるのではないか」などの意見が出された。